

## 2020 年度スポーツ庁委託事業

「障害者スポーツ推進プロジェクト（地域の課題に対応した障害者スポーツの実施環境の整備事業）」

# 成 果 報 告 書

2021 年 3 月  
（筑波大学）

本報告書は、スポーツ庁の委託事業として、筑波大学が実施した2020年度「障害者スポーツ推進プロジェクト（地域の課題に対応した障害者スポーツの実施環境の整備事業）」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。

# 目 次

1. はじめに	1
2. 本事業の概要	2
3. 事業実施者（プロジェクトメンバー）	5
4. 本事業内容	6
4-1. 事業実施の背景と目的	6
4-2. 定着研修会 WG	8
1) 活動概要	
2) 活動目標	
3) WG メンバー	
4) 活動内容	
5) まとめと今後の課題	
4-3. ガイドブック WG	22
1) 活動概要	
2) 活動目標	
3) WG メンバー	
4) 活動内容	
5) 今後の課題	
4-4. 広報 WG	39
1) 活動概要	
2) 活動目標	
3) WG メンバー	
4) 活動内容	
5) 今後の課題	
5. 本プロジェクトにおける将来計画	47

# 1. はじめに

事業実施責任者 齊藤まゆみ

令和2年度「障害者スポーツ推進プロジェクト（地域の課題に対応した障害者スポーツの実施環境の整備事業）」は、地域における通常の小中高等学校の体育現場において、アダプテッド体育・スポーツ（以降、アダプテッド）の視点が定着することを最終目標とした複数年計画の2年目として、前年度の取り組みによって導かれた課題の解決を事業目的として進めて参りました。アダプテッドの視点や技術を各地域の学校に定着していくための指導者となるべき人材の確保における阻害要因の確認や人材確保を促進するための手法についての調査研究を通して、小・中・高等学校等に在籍する障害児の体育・スポーツ実施環境の充実に資することを目的とした事業です。

今年度は新型コロナウイルス感染症対策により、さまざまな活動が制限をうけることとなり、当初予定していた対面形式での定着研修会も開催できなくなりました。しかし私どもの専門性であるアダプテッドを最大限発揮し、定着研修会は実習をも含めたオンライン形式を試み、その成果検証からは効果の安定性が確認されるなど、環境にあわせて着実にプロジェクトを遂行して参りました。その背景には、筑波大学と国内におけるアダプテッド体育・スポーツ学に関わる学術団体との有機的連携があります。この報告書には、スポーツを通じた共生社会の実現という社会的課題に応えるべく、大学の垣根を超えてスペシャリストが知恵を出し合い、ワーキンググループによる試行・実践を経てその評価をもとに導かれた内容がまとめられています。地域における通常の小中高等学校の体育現場において、アダプテッドの視点が定着するための基礎資料として活用されることを期待しています。

最後になりましたが、本事業にご協力いただきました多くの方々に感謝いたします。

2021年3月

## 2. 本事業の概要

### 1) 事業目的

本事業は、「地域における通常の小中高等学校の体育現場において、アダプテッド体育・スポーツの視点を定着させる」ことを最終目標とし、10年後に、地域の通常の小中高等学校の体育授業を担当している教員のうち、少なくとも9割が障害のある子どもを受け持つことに対して抵抗感を感じず指導できるという数値目標をたて、その目標を達成するために、課題①として、実際の実施可能な研修会カリキュラムを特定するため、検証を行うことと、課題②として、実際にアダプテッドを使って指導するためのガイドブックを作成すること、課題③として、「アダプテッド」の用語と意味を広くアピールするための方策を検討することを、今年度、取り組む課題として設定した。

それらの課題を解決するため、実行委員会を立ち上げ、実行委員会の監督のもと、3つのワーキンググループ(WG)を立ち上げた。課題①に対応するために定着研修会WGを、課題②に対応するためガイドブックWGを、課題③に対応するため、広報WGを設置した。

### 2) 定着研修会WG

定着研修会WGは、障害のある児童生徒が体育授業へのインクルーシブな参加を促進するための各地域におけるキーパーソンとなる、アダプテッド体育・スポーツを理解し、実践できる教師や、指導力向上の研修・講習の講師となるリーダー的人材の育成及び確保を促進するための教材や手法について検証を行うことを目的に作業を行うグループである。今年度は、コロナ禍という状況下において、唯一実施できたオンライン型の教員免許更新講習会を対象に、講習会担当者の同意のもと、昨年度実施した定着研修会カリキュラムを適用し、そのカリキュラムの検証を行った。その結果、研修会に対する参加者の評価は昨年度と同様に概ね好評で、研修会を通して、受講者の多くは、期待される望ましいと思われる変化をしていた。「アダプテッドの主体性・適応性」以外、昨年度の講習による変化と同様の傾向がみられたため、カリキュラム構造は安定していると思われた。ちなみに「アダプテッドの主体性・適応性」が昨年度の結果と異なった点については検討の結果、オンライン型の研修であったことが影響している可能性が指

摘された。その点についての検討は必要だが、大枠としての定着研修会のコアカリキュラム（6時間）は、今年度の結果をもって確定することとした。

今後、定着研修機会をいかに増やしていけるかが課題である。そのためには、研修会の方法（研修会パッケージ）を、6時間を想定したものだけでなく、2日間や3時間、1.5時間などを想定したモデルを提示する必要があると考えた。また小中学校の通常学級の教員と特別支援学校の教員など研修対象者の障害児教育の体験の有無などによって、研修の内容や方法を考える必要があると考えられた。

### 3) ガイドブック WG

定着研修会内容を現場で活用することを念頭に、障害のある児童生徒が在籍するクラスでの体育授業を担当している教員が、実際に体育授業をする際の困難さを解決するための調査用ガイドブックを作成した。その内容は「理論編」と「実践編」の2部構成で、「理論編」は2019年度に実施した研修資料をベースとし、「実践編」はプロジェクトメンバーによって新たに作成した。

そして調査用ガイドブックの有効性を明らかにすることを目的にアンケート調査を実施した。その結果、教育経験年数が10年未満の群は経験年数が10年以上の群に比べて、全ての項目において評価が高い傾向にあった。その中でも、「実践編のわかりやすさ」、「構成の見やすさ」、「実践編の文章やイラストの分量の適切さ」、「データベースへの探求意欲」については有意な差が見られた。このことから、ベテランの教員より初任者向けのガイドブックであったと考えられた。また、自由記述においては、具体的な内容や実践に関する内容を求める声が多かった。

アンケート調査の結果を基にガイドブックの今後の方向性について検討を行い、対象を、アダプテッドの経験が相対的に少ないと考えられる初任者から在職年数が概ね10年程度の教員であるとし、構成と内容については、「実践編」においては、アダプテッドの具体的な内容をステップ構造（基礎から応用への段階構造）で提示するとともに、分量的には多過ぎず、レベルや表現などは専門的になり過ぎない範囲を目指すことが方向づけられた。

今後はデータベースとガイドブックをリンクさせ、視覚的でより具体的な情報をアップデートしながら提供することについて前向きに検討された。

#### 4) 広報 WG

国内において「アダプテッド」の社会的周知を目的に、「アダプテッド」の用語と意味を広くアピールすることを目的に、HP の構築と、その媒体を活用して宣伝・相互リンク事業を行い、アダプテッドに関するセミナーを開催することを本 WG の事業目標としている。今年度は、主に、現場志向型のコンテンツ構造をもった HP の構築の試用を行うことを優先的な具体的課題として活動を行った。すなわち現場的志向性を高めるため、現職教員を WG メンバーに加え、HP の構成やコンテンツについて検討を重ねた。

その結果、障害のある児童生徒が体育授業にいる教員が、授業で何をしようかと考える際に利用、閲覧の動機が高まるように工夫した HP を作成、そして HP を活用するなかでアダプテッドの視点やスキルが身につくような HP になることを目的に、試行的に JINDO®の無料 HP 作成ウェブページを使って構築した。

今後の課題として、継続的に HP の拡充をはかるためには持続的に更新・編集できるための計画を策定する必要があると考えた。また、HP を通して、これまでのアダプテッド定着プロジェクトの事業成果を報告するとともに、他学会や学校体育関係機関への「アダプテッド」の広報を目的にセミナーを開催することを計画したいと考えた。

#### 5) 本プロジェクトにおける将来計画

2021 年度は、2020 年度の成果をもとに、課題①として、定着研修会のコアカリキュラム（プロトタイプ）をもとに、さまざまな研修会の実施計画をたてて実施し、2020 年・19 年の研修会成果と同様の成果が現れるのかを検証するとともに、定着研修会の講師ができる人材を育成する必要がある。そして課題②として、研修会の成果を現場に反映させるために、研修会内容をより深く知るためのリンクを含めたガイドブックを発行することを計画している。また課題③として、研修会の内容やガイドブックの内容を深めるためにウェブページの充実をはかることを計画している。

これらの事業を通して、地域における通常の小中高等学校の体育現場において、障害者スポーツ指導の基本である「アダプテッド体育・スポーツ」の視点が定着するための具体的提言をしていきたいと考えている。

### 3. 事業実施者（プロジェクトメンバー）

- 齊藤まゆみ 筑波大学体育系 准教授（代表・実行委員会委員座長）
- 松原 豊 筑波大学体育系 教授（実行委員会委員）
- 澤江 幸則 筑波大学体育系 准教授（渉外担当・実行委員会委員・広報 WG 座長・定着研修会 WG 委員・ガイドブック WG 委員）
- 杉山 文乃 筑波大学体育系 助教（実行委員会委員・ガイドブック WG 座長・定着研修会 WG 委員）
- 内田 匡輔 東海大学体育学部 教授（実行委員会委員）
- 金山 千広 立命館大学 教授（実行委員会委員）
- 香田 泰子 筑波技術大学 教授（定着研修会 WG 委員）
- 藤田 紀昭 日本福祉大学 教授（実行委員会委員）
- 吉岡 尚美 東海大学体育学部 教授（広報 WG 委員）
- 阿部 崇 東京家政大学 准教授（ガイドブック WG 委員）
- 天野 和彦 筑波技術大学 准教授（ガイドブック WG 委員）
- 吉永 武史 早稲田大学 准教授（実行委員会委員）
- 村上 祐介 金沢医科大学 助教（実行委員会委員）
- 綿引 清勝 小田原短期大学 専任講師（ガイドブック WG 委員）
- 十河 克次 茨城県立つくば特別支援学校 校長（定着研修会 WG 委員）
- 小沼 博義 茨城県立友部特別支援学校 教頭（定着研修会 WG 委員）
- 宗田 光博 埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園 教諭（広報 WG 委員）
- 今城 遥 愛媛大学附属高等学校 特定教員（広報 WG 委員）
- 凵子 美和 筑波大学体育系 非常勤事務員（事務作業担当）



## 4. 本事業内容

### 4-1. 事業実施の背景と目的

本事業は、「地域における通常の小中高等学校の体育現場において、アダプテッド体育・スポーツ（以降、アダプテッド）の視点が定着する」ことを最終目標とし、10年後に、地域の通常の小中高等学校の体育授業を担当している教員のうち、少なくとも9割が障害のある子どもを受け持つことに対して抵抗感を感じず、8割が障害のある子どもに指導することに不安を感じないで、7割が「アダプテッド」の用語を聞いたことがあるなかで、6割がアダプテッドの視点をもって指導できるという数値目標をたてた。

上記の目標を達成するために、まずは3年間（2019年度-2021年度）の計画（アダプテッド定着第一次計画）をたてた。2019年度は、アダプテッドの視点を定着するうえで必要とされるカリキュラムの試案を行ない、そのカリキュラムを使った研修会（定着研修会）の効果検証を行なった。

2020年度以降は、2019年度の取り組みによって導かれた課題の解決を事業目的とした。すなわち、課題①は定着研修会に関する課題であり、（課題①-1）実際の実施可能な研修会における実証検証を行うことと、（課題①-2）将来的に体育授業担当教員必修の研修・講習会、もしくは、その他のテーマとの抱き合わせ研修・講習会において、アダプテッドに関心のない教員へのニーズの掘り起こしを目的とした研修・講習会を想定し、6時間だけでなく3時間や1.5時間のパッケージについて検討すること、そして（課題①-3）研修会で講師ができる人材育成のための講師養成講習会の実施方法について検討することである。2020年においては、コロナ禍という状況下で、実際に実施できる研修会が限られているため、今回は（課題①-1）の解決を中心とした。

ついで課題②は研修会に使用し、実際に指導の際のガイドブックとなるテキストを作成することである。最後に課題③は「アダプテッド」の用語と意味を広くアピールするための方策を検討することである。これら2つの課題については2020年度において中心的に実施していきたいと考えた。

そしてこれらの解決を通して、2021年度までに、定着研修会の拡充のための全体研修構造を開発し、将来的には通常学級の体育授業担当者が必然的に受講できるような枠

組みを構築する。さらに、そのなかで定着研修会の講師ができる人材の養成のため講師養成講習会を実施していきたいと考えている。

また実践用の資料としてガイドブックを作成し公表するだけにとどまらず、デジタル資料などを HP に置くなど、多くの現場の教師が、アダプテッドの考え方や手法を手にとりやすい環境を構築したいと考えている。将来的には、この資料が、学習指導要領のための指導書のひとつになることも期待している。

そしてアダプテッドが広く周知されるために、まずは HP を構築し、多くの人、特にとりわけ、障害のある児童生徒がいる体育現場に関わっている教師に HP を訪問してもらうための方策を考える必要があると考えた。将来的には、他学会や専門領域との共同企画のシンポジウム等を実施するとともに、本事業で構築した HP のリンクを貼ることを許される他学会や専門領域、体育関連の HP の数を増やしていきたいと考えている。

上記の3つの課題を達成するため、3つのワーキンググループ（WG）を設置した。すなわち、課題①を達成するために定着研修会 WG と、課題②を達成するためにガイドブック WG、課題③を達成するために広報 WG である。

## 4-2. 定着研修会 WG

### 1) 活動概要

定着研修会 WG は、障害児が体育授業やスポーツ活動へのインクルーシブな参加を促進するための各地域におけるキーパーソンとなる、アダプテッド体育・スポーツを理解し、実践できる教師や、指導力向上の研修・講習の講師となるリーダー的人材の育成及び確保を促進するための教材や手法について検証を行った。

研修会の実施前に WG を開催し、研修会の方針、対象、内容などについて検討した。

#### ① 研修会の方針

研修会は、教員免許更新講習を兼ね、6 時間の講義、演習を実施する。

#### ② 研修内容

基本として昨年度実施したカリキュラムの指導案に沿って講義、演習を行うが、担当する講師の判断で内容を変更してもよい。

#### ③ 研修方法

コロナの感染拡大を防ぐためにオンラインで実施する。

#### ④ 研修対象者

教員免許更新講習を希望する小中高等学校学校及び特別支援学校教員とする。

#### ⑤ 研修会講師

研修プログラムの講師は澤江幸則委員が担当する。

#### ⑥ 研修会の評価

研修の前後に 10 分程度時間をとり、アンケート調査及びアダプテッド・センシティブ尺度（仮称 AS 尺度）によって評価を行う。

研修会の内容及び評価等について検討するために第 2 回検証 WG を開催し、澤江委員より研修会の概要及び参加者の評価について統計処理された資料をもとに説明があり、その後、質疑応答や意見交換を行った。

### 2) 活動目標

小・中・高等学校及び特別支援学校に在籍する障害のある児童生徒の体育授業の充実

に資するため、障害のある児童生徒のための体育指導において、指導者となるべき人材確保を促進するための手法に関する調査研究を目的として定着研修会を企画、実施し、評価を行う。

### 3) WG メンバー

今回の実証研修会について検討及び評価するための、アダプテッド定着検証ワーキンググループ（以後、検証WG）を以下のようなメンバーで組織した。

- 松原 豊 （筑波大学教授）
- 香田 泰子 （筑波技術大学教授）
- 十河 克次 （茨城県立つくば特別支援学校校長）
- 小沼 博義 （茨城県立友部特別支援学校教頭）
- 澤江 幸則 （筑波大学准教授）
- 杉山 文乃 （筑波大学助教）

### 4) 活動内容

#### 4-1) 定着研修会の実施経緯

今年度は、コロナ禍のため、本来対象としていた研修会が対面形式で予定通りに実施しないことがわかった。そのなか、筑波大学で開催される教員免許更新講習会がオンライン（Zoom®）で実施することを受け、この講習会を対象とした。すなわち、「令和2年度教員免許更新講習会【選択B】特別支援教育における体育の授業づくり～すべての子どもが“いきいきと輝く”体育活動をめざして～」(担当教員 澤江幸則)において、本プロジェクトで策定された定着研修会カリキュラムを、オンラインの形式に合わせて変更し実施することにした。

この講習会の講義概要は、「特別支援教育の理念を実現するために、体育はどのような役割を担えるのか？ 障害のある子どものいる体育の現状を分析し、課題を共有する。そこから障害のある子どもが“いきいきと輝く”体育活動とはどのようなものか、新しい視点での体育について考える。」となっており、本プロジェクトの趣旨に合致することから、定着研修会カリキュラムそのものを適用することが可能であると判断した。

#### 4-2) 受講者状況

本講習会を受講した者は29名で、30代から60代以上まで、年齢層としては偏りなく分散していた。また性別では、女性18名、男性11名で、女性が若干多かった。小学校に勤務している者が12名、特別支援学校に勤務している者が14名、その他が2名であった。

#### 4-3) 定着研修会としての構造

更新講習会の行程に、定着研修会としてのカリキュラムを以下のように適用した。

時間	更新講習会としての行程	定着研修会としてのカリキュラム
9:00	オリエンテーション1	事前アンケート
9:10	特別支援教育における体育の現状	障害児の体育指導の意義と理念
10:00	休憩	
10:10	障害のある子どもがいる体育実践	障害のある子どもの体育とインクルージョン
11:00	休憩	
11:10	討議：各々の体育実践の紹介	実践経験の振り返りと共有
12:00	ランチタイム	
13:00	オリエンテーション2	
13:10	アダプテッドの実践演習	オンラインによるアダプテッド演習
14:30	休憩	
14:40	インクルーシブ体育の実践演習	オンラインによるインクルーシブ演習
15:20	休憩	
15:30	ふりかえり	事後アンケート
16:00	休憩	
16:10	諸注意・PW開示・認定試験	
17:00	終了	

##### 4-3-1) 講義：障害児の体育指導の意義と理念

障害児の体育指導の意義と理念（特別支援教育における体育の現状）に関する講義では、①スポーツの権利、②インクルーシブ教育の意義、③インクルーシブ体育の問題と解決、④問題解決のための構造（特に多様性とインクルージョン、それらの橋渡しとしてのアダプテッドとの関係）、⑤アダプテッドの説明（定義とエコロジカルモデル、合理的配慮との関係、インクルージョン・スペクトラム・モデル）について論説するなかで、アダプテッドについての理論的理解を促すことを試みた。

#### 4-3-2) 講義：障害のある子どもの体育とインクルージョン

障害のある子どもの体育とインクルージョン（障害のある子どもがいる体育実践）の講義では、①障害の一般的定義とともに、②実際の運動場面での困難さを、当事者視点から、複数の事例を紹介した。今回は、知的・発達障害を中心とした。これらの概説をもとに、アダプテッドをする前提となる**対象者への共感的態度**を涵養することを試みた。

#### 4-3-3) 討議：実践経験の振り返りと共有

参加者各々の体育実践の紹介の討議（実践経験の振り返りと共有）では、①お互いの実践情報を共有しながら、②実践内容において互いに共通するところと違いを確認し、その違いの理由について考える機会とした（地域差、経験、知識、信念など）。今回は Zoom のブレイクアウトルーム機能を使って、少人数グループによる討議形式をとった。その討議をもとに、ここまでの講義で出てきた**アダプテッドの必要性についての気付き**になることを期待した。

#### 4-3-4) 演習：オンラインによるアダプテッド体験

①現在ある障害者スポーツの成り立ちを探索することで、アダプテッドの構造について理解できるように概説した。その後、実際にボッチャを教材に、その開発過程を調べることを通して、アダプテッドについての学びを深めた。②そして実際に、各自、新聞紙でボールを作成、ひとりボッチャを行ってもらった。そこでこのスポーツの魅力について共有できるように試みた。③そのうえで、仮想ケース（例えば、全盲の 20 代の女性）を設定し、そのケースが、このスポーツの魅力を感じるために必要なアダプテッドについて話し合ってもらった。時間がなかったため、実施できなかったが、③実際に、自分自身が目を閉じた状態で、プレーをしてもらい、アクションリサーチ的にアダプテッドの改善を繰り返し、最終的な方法を発表する予定であった。このような演習を通して、**アダプテッドの方法を知る（もしくはこれまでの自らの実践がアダプテッドであったことを確認する）**ことを目的とした。

#### 4-3-5) 演習：オンラインによるインクルーシブ体験

①インクルーシブ体育に求められる視点（アダプテッド・ダイバーシティ・コンパッション）を確認し、②実際に、インクルーシブ体育場面を想定したロールプレイを実施、

③そのうえで、インクルーシブ体育に求められる視点や具体的行動などを参加者と共有した。

#### 4-4) 定着研修会としての評価

##### 4-4-1) 調査目的

今回の定着研修会の実施目的が、昨年度策定されたカリキュラムがどの程度、安定して成果を得ることができるかが目的であったことから、本調査では、昨年度実施した定着研修会で使用した調査項目をもとに、昨年度と今回の調査結果を比較し検討することにした。

##### 4-4-2) 調査対象

定着研修会を受講し WEB アンケートの協力を得た者のうち欠損値がなかった 17 名（小学校教員 7 名；通常学級 5 名・支援学級 2 名、特別支援学校教員 10 名；小学部 2 名・中学部 3 名・高等部 3 名：支援部 2 名）を対象に、定着研修会に対する評価を尋ねた。

##### 4-4-3) 調査項目および分析方法

本研修会への評価として、「アダプテッドの理解ができた」や「インクルーシブの理解ができた」など 7 項目について、「そう思う」から「そう思わない」までの 4 件法で尋ねられた。

また、アダプテッド・センシティブ尺度（仮称：AS 尺度）を使用して（強制 3 選択回答）、アダプテッドの感性（障害や障害スポーツに対するイメージのポジティブ化やアダプテッドに対する自発性、アダプテッドに対する適用性）と、研修会の評価とは別に、アダプテッドおよびインクルーシブについてどの程度自覚的に理解しているかを知るために、アダプテッドおよびインクルーシブの理解度（アダプテッドという言葉について、「聞いたことがない」から「意味も具体的な方法も理解している」の 4 件法で尋ねた。「意味も具体的な方法も理解している」を 4 点として、理解度が高いほど得点が高くなるように設定した）に、研修会を通して、どの程度、変化がみられたかを明らかにすることを試みた。それらの評価項目は研修会の実施前後に行ったアンケート結果を活用した。それらの結果を、小学校群（7 名）と特別支援学校群（10 名）に分け、所属

と研修会前後の要因を配置した繰り返し測定型二元配置分散分析（MANOVA）を実施した。分析には、IBM SPSS Statics 26 for Mac を使用した。

#### 4-4-4) 主な調査結果と考察

##### ① 本研修会への評価

図4-2-1の通り、今回の対象者は「講習会講師を受ける」以外の項目において肯定的な回答であった。従って、本研修会は、受講した者にとって肯定的経験になったものと理解できるが、それを講師として伝える段階までには至っていなかった。

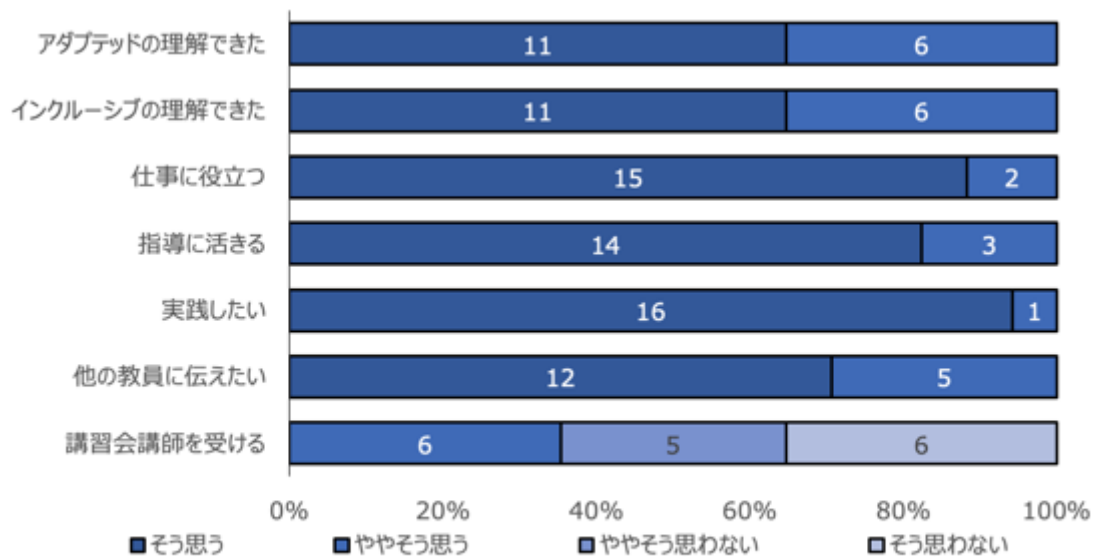


図4-2-1 : 研修会内容について



**表4-2-1：研修会内容について（学校種による比較）**

		そう思う	やや思う	やや思わない	思わない
アダプテッドの理解できた	小学校	4 57.1%	3 42.9%		
	特別支援学校	7 70.0%	3 30.0%		
インクルーシブの理解できた	小学校	3 42.9%	4 57.1%		
	特別支援学校	8 80.0%	2 20.0%		
仕事に役立つ	小学校	5 71.4%	2 28.6%		
	特別支援学校	10 100.0%			
指導に生きる	小学校	5 71.4%	2 28.6%		
	特別支援学校	9 90.0%	1 10.0%		
実践したい	小学校	6 85.7%	1 14.3%		
	特別支援学校	10 100.0%			
他の教員に伝えたい	小学校	3 42.9%	4 57.1%		
	特別支援学校	9 90.0%	1 10.0%		
講習会講師を受けらる	小学校		2 28.6%		5 71.4%
	特別支援学校		4 40.0%	5 50.0%	1 10.0%

また、表4-2-1の通り、学校種による比較をしてみたところ、「インクルーシブの理解できた」と「他の教員に伝えたい」の項目において、小学校群が特別支援学校群に比べて肯定的ではない傾向がみられた。これは後のアダプテッド自発性得点やアダプテッド適用得点に関するところで触れるが、今回の研修会はオンライン形式の演習であったため、過去の障害のある児童生徒との関わり経験が、演習を通じた理解に影響を与えた可能性が否定できない。そのため、今回の研修会が、障害のある児童生徒との関わり経験の多い特別支援学校群に有利であったと考えられた。

## ② アダプテッド・センシティブ尺度

図4-2-2の通り、「障害」に対するイメージのうち「個性」や「その人らしさ」、「できることがある」のポジティブな面の項目が、研修会を通して選択される傾向があることがわかった。また図4-2-3の通り、「障害者スポーツ」に対するイメージのうち「楽しさ」や「チャレンジしてみたい」といったポジティブな面の項目が、研修会を通して選択される傾向があることがわかった。

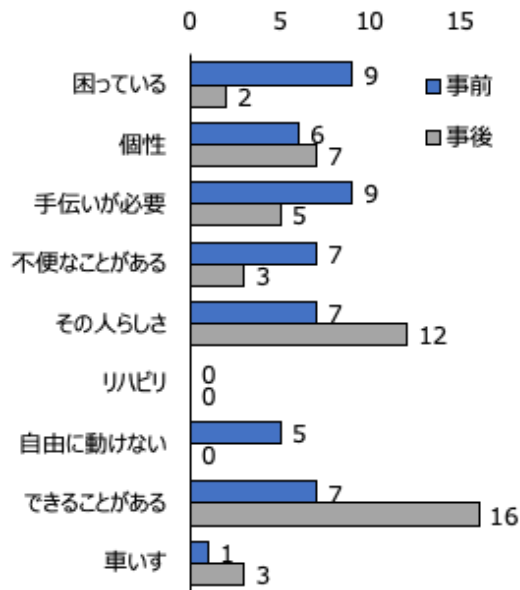


図4-2-2. 「障害」から連想するイメージ

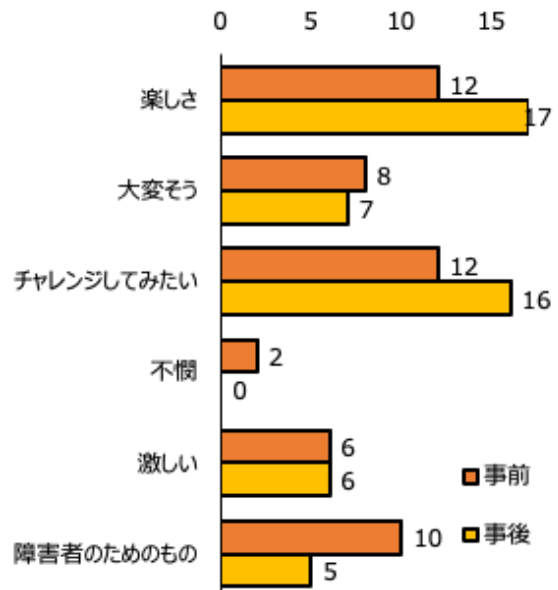


図4-2-3. 「障害者スポーツ」から連想するイメージ

図4-2-4の通り、アダプテッドに対する何か別の外的なものに頼るのではなく、自発的に対応しようとする項目（「スポーツのルールを変えること」や「障害のある児童生徒と相談すること」、「障害のある児童生徒をサポートすること」）のうち2項目が、研修会を通して選択されるようになる傾向がみられた。また図4-2-5の通り、本人の努力や代替、不参加ではなく、ルールやモノ、ヒトに対してアダプテッドすることが求められる項目（「障害児も楽しめるようにルールをかえる」や「みんなが車いすにのる」、「障害児が使いやすいボールにかえる」）のうち2つは天井効果で、ひとつは研修会を通して選択される傾向があった。特に「障害児に練習をがんばってもらおう」といった本人の努力に関する項目を選択する者が、研修会を通して減る傾向であった。

このことから、研修会前からアダプテッドに対する一定の理解があったものが多かったなか、研修会を通して、よりアダプテッドに対する意識が高まったことが窺えた。

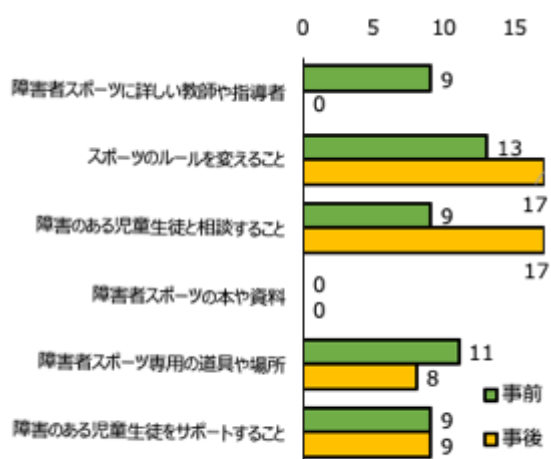


図4-2-4. アダプテッドに対する自発性

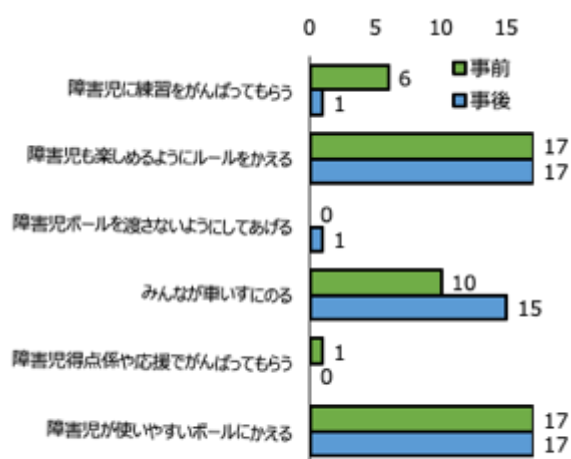


図4-2-5. アダプテッドに対する適用性

また、上記の領域毎に、独自の方法で数値化することを試みた。すなわち「障害」イメージと「障害者スポーツ」イメージに関する得点（「障害」イメージ得点と「障害者スポーツ」イメージ得点）は、高ければ高いほどポジティブ項目を多く選択する傾向があることを意味し、アダプテッドに対する自発性に関する得点（アダプテッド自発性得点）は、高ければ高いほど、自発的に対応しようとする項目を多く選択する傾向があることを意味し、アダプテッドに対する適用性に関する得点（アダプテッド適用性得点）は、高ければ高いほど、ルールやモノ、ヒトに対してアダプテッドすることが求められる項目を多く選択する傾向があることを意味した。

そのうち、「障害者スポーツ」イメージ得点と「障害」イメージ得点を、所属（小学校・特別支援学校）によるクロス分析を行い、それらの分析結果を、昨年度の表と比較できるように図4-2-6に示した。すなわち、今回の調査結果において、「障害者スポーツ」イメージ得点は、小学校群が特別支援学校群より、研修会を通して大きく向上する傾向があった。また「障害」イメージ得点は、小学校群と特別支援学校群がともに、研修会を通して大きく向上する傾向があった。これらの傾向は、昨年度の調査結果と同様であった。

表2-5：所属×障害者スポーツイメージ傾向のクロス分析および分散分析、多重比較						
今年	平均値 (±SD)		分散分析 (F値1,28)			多重比較
	研修前	研修後	所属	前後	交互作用	群別
小学校 (7)	2.00 (±0.82)	2.71 (±0.49)	6.483*	9.796**		小学：前後*
特支学校 (10)	1.60 (±0.70)	2.00 (±0.82)				後：小学>特支*
主効果は (F値1,15)、交互作用は (F値1,15)、ともに球面性の仮定に依拠した。多重比較はBonferroniに依拠した						
表2-6：所属×障害イメージ傾向のクロス分析および分散分析、多重比較						
去年	平均値 (±SD)		分散分析 (F値1,28)			多重比較
	研修前	研修後	所属	前後	交互作用	群別
小学校 (6)	1.00 (±0.89)	2.33 (±0.82)		18.474**		小学・特支：前後*
特支学校 (10)	1.30 (±1.06)	2.10 (±0.74)				
主効果は (F値1,14)、交互作用は (F値1,14)、ともに球面性の仮定に依拠した。多重比較はBonferroniに依拠した						
**：p<.01 *：p<.05 †：p<.10						
表2-5：所属×障害者スポーツイメージ傾向のクロス分析および分散分析、多重比較						
今年	平均値 (±SD)		分散分析 (F値1,28)			多重比較
	研修前	研修後	所属	前後	交互作用	群別
小中教員 (15)	1.87 (±0.74)	2.27 (±0.59)	2.051	12.526**	0.900	小中：前後*
特支教員 (8)	2.25 (±0.89)	2.63 (±0.52)				主事：前後*
指導主事等 (8)	2.25 (±0.46)	2.75 (±0.46)				
表2-6：所属×障害イメージ傾向のクロス分析および分散分析、多重比較						
去年	平均値 (±SD)		分散分析 (F値1,28)			多重比較
	研修前	研修後	所属	前後	交互作用	群別
小中教員 (15)	0.93 (±0.96)	1.93 (±0.59)	3.658*	35.011**	0.062	小中：前後**
特支教員 (8)	1.63 (±0.92)	2.50 (±0.76)				特支：前後**
指導主事等 (8)	1.50 (±0.54)	2.50 (±0.54)				主事：前後**
主効果は (F値1,28)、交互作用は (F値2,28)、ともに球面性の仮定に依拠した。多重比較はBonferroniに依拠した						
**：p<.01 *：p<.05 †：p<.10						

図 4-2-6. 「障害者スポーツ」イメージと「障害」イメージ得点と学校種によるクロス分析結果と昨年度調査結果の併記

そして、アダプテッド自発性得点とアダプテッド適用性得点を、所属（小学校・特別支援学校）によるクロス分析を行い、それらの分析結果を、昨年度の表と比較できるように図 4-2-7 に示した。

すなわち、両得点とともに、両群ともに研修会を通して高くなる傾向はあるが、特別支援学校群が小学校群より、有意に向上する傾向がみられたのである。昨年度は、両得点ともに、小学校群は研修会を通して高くなる傾向はあるが、特段、特別支援学校群より高まるとは十分には言えなかった。

今回は特に特別支援学校群が小学校群と比較して、アダプテッド自発性得点と適用性得点が向上した理由に、コロナ禍によってオンライン形式となったことが考えられた。すなわち、対面の研修会での演習場面では、想定された事例を、実際の体育館などの場や道具、課題などの具体的状況を、参加者同士で直接共有しながら課題の解決をはかることが多い。そのため、障害のある児童生徒との関わりが少ない参加者であっても、その具体的状況によってイメージしやすくなることが考えられる。その一方で、オンライン形式による演習では、そうした具体的状況をつくりだすことが難しく、参加者の過去の経験と、その経験をもとにした高次の想像力を駆使しなければならないなど、個人の

認知能力に委ねられる場合が少なくない。

少なくとも今回の演習では、十分な具体的状況を設定することができなかったため、過去に障害のある児童生徒と関わっていた経験が多い参加者に有利だった可能性がある。その点で考えると、今回の研修会では、小学校群より特別支援学校群の参加者の方が、さまざまな障害のある児童生徒と関わっている機会が多いことが予想されたため、変化が大きかったものと考えられた。

つまりアダプテッド自発性得点とアダプテッド適用性得点において、昨年度の傾向と異なった理由に、今回の演習がオンライン形式であったことが考えられたのである。

今年	表2-3：所属×アダプテッド体育への自発性のクロス分析および分散分析、多重比較						
	平均値 (±SD)		分散分析 (F値1,28)			多重比較	
	研修前	研修後	所属	前後	交互作用		
小学校 (7)	2.14 (±0.69)	2.57 (±0.53)		16.48**		特支：前後*	
特支学校 (10)	1.60 (±0.52)	2.50 (±0.53)					
主効果は (F値1,15)、交互作用は (F値1,15)、ともに球面性の仮定に依拠した。多重比較はBonferroniに依拠した							
去年	表2-3：所属×アダプテッド体育への自発性のクロス分析および分散分析、多重比較						
	平均値 (±SD)		分散分析 (F値1,28)			多重比較	
	研修前	研修後	所属	前後	交互作用		
小学校 (7)	2.57 (±0.53)	2.71 (±0.49)				特支：前後*	
特支学校 (10)	2.60 (±0.52)	3.00 (±0.00)					
主効果は (F値1,15)、交互作用は (F値1,15)、ともに球面性の仮定に依拠した。多重比較はBonferroniに依拠した							
**：p<.01 *：p<.05 †：p<.10							
今年	表2-4：所属×アダプテッド体育への適用性のクロス分析および分散分析、多重比較						
	平均値 (±SD)		分散分析 (F値1,28)			多重比較	
	研修前	研修後	所属	前後	交互作用		
小中教員 (15)	1.60 (±0.74)	1.93 (±0.59)		2.498	3.057†	0.212	
特支教員 (8)	1.63 (±0.52)	1.75 (±0.46)					
指導主事等 (8)	2.00 (±0.76)	2.38 (±0.74)					
表2-4：所属×アダプテッド体育への適用性のクロス分析および分散分析、多重比較							
	平均値 (±SD)		分散分析 (F値1,28)			多重比較	
	研修前	研修後	所属	前後	交互作用		
小中教員 (15)	2.40 (±0.51)	2.67 (±0.49)		3.955*	2.438	1.670	前：特支>小中*
特支教員 (8)	3.00 (±0.00)	2.88 (±0.35)					小中：前後†
指導主事等 (8)	2.63 (±0.74)	3.00 (±0.00)					主事：前後†
主効果は (F値1,28)、交互作用は (F値2,28)、ともに球面性の仮定に依拠した。多重比較はBonferroniに依拠した							
**：p<.01 *：p<.05 †：p<.10							

図 4-2-7. アダプテッド体育の自発性得点と適用性得点と学校種によるクロス分析結果と昨年度の調査結果の併記

### ③ アダプテッドおよびインクルーシブの理解度

図 4-2-8 の通り、本研修会を通して、参加者はアダプテッドおよびインクルーシブに対して自覚的に理解する傾向にあった。

アダプテッドはそもそも特別支援学校群では日常的に行われていることが推察されることから、今回の結果は、小学校群が、研修会を通して、特別支援学校群の理解度レベルに近づく傾向がみられたという解釈ができる。またインクルーシブに関しては、小

学校群が特別支援学校群との間に大きな差はなかった。これらの傾向は、昨年度と同様であった。

	平均値 (±SD)		分散分析 (F値1,28)			多重比較
	研修前	研修後	所属	前後	交互作用	
小学校 (7)	1.29 (±0.49)	4.00 (±0.00)	445.56**	55.573**	8.317**	小学・特支：前後*
特支学校 (10)	2.10 (±0.57)	3.30 (±1.16)				前：特支>小学*
主効果は (F値1,15)、交互作用は (F値1,15)、ともに球面性の仮定に依拠した。多重比較はBonferroniに依拠した						

**表2-1：所属×アダプテッド理解度のクロス分析および分散分析、多重比較**

	平均値 (±SD)		分散分析 (F値1,28)			多重比較
	研修前	研修後	所属	前後	交互作用	
小学校 (7)	2.57 (±0.79)	4.00 (±0.00)		50.633**		小学・特支：前後*
特支学校 (10)	3.00 (±0.82)	3.90 (±0.32)				
主効果は (F値1,15)、交互作用は (F値1,15)、ともに球面性の仮定に依拠した。多重比較はBonferroniに依拠した						

**表2-2：所属×インクルーシブ理解度のクロス分析および分散分析、多重比較**

\*\*：p<.01 \*：p<.05 †：p<.10

**去年**

	平均値 (±SD)		分散分析 (F値1,28)			多重比較
	研修前	研修後	所属	前後	交互作用	
小中教員 (15)	1.80 (±0.86)	3.80 (±0.41)	1471.535**	54.393**	4.015**	小中：前後**
特支教員 (8)	3.38 (±0.52)	3.88 (±0.35)				主事：前後*
指導主事等 (8)	3.25 (±0.71)	3.87 (±0.35)				前：特支>小中・主事*
主効果は (F値1,28)、交互作用は (F値2,28)、ともに球面性の仮定に依拠した。多重比較はBonferroniに依拠した						

**表2-1：所属×アダプテッド理解度のクロス分析および分散分析、多重比較**

	平均値 (±SD)		分散分析 (F値1,28)			多重比較
	研修前	研修後	所属	前後	交互作用	
小中教員 (15)	3.27 (±0.70)	3.73 (±0.46)	3.438*	6.069*	1.691	前：主事>小中†
特支教員 (8)	3.75 (±0.46)	3.88 (±0.35)				小中：前後*
指導主事等 (8)	3.87 (±0.35)	4.00 (±0.00)				
主効果は (F値1,28)、交互作用は (F値2,28)、ともに球面性の仮定に依拠した。多重比較はBonferroniに依拠した						

\*\*：p<.01 \*：p<.05 †：p<.10

図 4-2-8. アダプテッドおよびインクルーシブ理解度得点と学校種によるクロス分析結果と昨年度の調査結果の併記

## 5) まとめと今後の課題

### 5-1) 定着研修会カリキュラム

以上の結果を定着研修会 WG メンバーで検討した結果、以下のような理由から今後、同様の研修会カリキュラムをコアカリキュラムとして実施していくという結論になった。

- 研修会に対する参加者の評価は昨年度と同様に概ね好評であった。
- 研修会を通して、受講者の多くは、期待される望ましいと思われる変化をしていた。
- 障害や障害者スポーツに対するイメージはポジティブに変化した。
- 研修会の前は、障害児の指導に対して、専門家、道具などに頼る傾向があるが、受講後は自分から進んで工夫をする傾向に変わる。

- 本年度の結果は「アダプテッドの主体性・適応性」以外、昨年度の講習による変化と同様の傾向がみられたため、カリキュラム構造は安定していると思われる。

昨年度に比べて「アダプテッドの主体性・適応性」にも望ましい変化があった。しかし、今回の研修では、小学校の教員より、特別支援学校の教員の方が良い効果があった。この点は、オンラインの研修であったことが影響している可能性があると考えられた。普段、障害のある児童生徒と接することが少ない小学校の教員は、オンラインのため実体験ができず、アダプテッドやインクルーシブに関してイメージが湧きにくく、理解が深まらなかった可能性がある。逆に、特別支援学校の教員は、障害のある児童生徒との経験が十分にあるため、小学校の教員よりもイメージしやすく、研修会の効果が高かったことが推察された。

また、小中学校の教員には、そもそもスポーツのルールを変えていいのかと思っている人が多いのではないかと考えられた。小学校では、体育が好きな子どもはルールを変えること、特定の子どもに対してルールを適応することに抵抗感を感じる場合がある。それを教員が調整していく必要がある。そして、小・中学校の教員の多くは障害のある児童生徒の理解が十分ではなく、指導経験もないと思われる。そのため、研修の中に障害のある児童生徒の実態をイメージできるような内容が必要かもしれない。そのため、アダプテッドやインクルーシブに特化した演習をカリキュラムに取り入れること自体は望まれるが、初心者には実際的な体験を含めた演習がより効果的であると考えられた。

以上のことから、図4-2-9にある内容を、定着研修会コアカリキュラムとして設定することにした。

(1) アダプテッドの理論的位置づけ  
 (2) 障害児体育の実態の理解（児童生徒観）  
 (3) アダプテッドに特化した演習  
     • スポーツの魅力を阻害するものを取り除くためのアダプテッドの工夫への気付き  
     • アクション・リサーチを導入  
 (4) インクルーシブに特化した演習  
     • 活動をするうえでの「違い」を知る方法を探る  
     • 「違い」を前提とした活動内容を考える

をコアカリキュラムとし、時間によって、種目や障害種を増減するようにする。また参加者のこれまでの実践経験を共有するセッションを組み込むのもよい。

図4-2-9. 定着研修会コアカリキュラム内容

### 5-2) 研修会方法の多様化への対応

今回は教員免許更新講習会（選択制）として研修会を実施したため、研修時間は6時間であった。今後、こうした機会をいかに増やしていけるかが課題である。その課題を解決するためには、研修会の方法（研修会パッケージ）を多様化することが考えられる。例えば、筑波大学が主催している公開講座のような2日間の研修、初任者研修のような2～3時間の研修、校内研修のような1.5時間の研修などである。研修内容は「アダプテッドの理論的位置づけ」「障害児体育の実態の理解（児童生徒観）」「アダプテッドに特化した演習」「インクルーシブに特化した演習」をコアカリキュラムとし、研修時間の多少によって、種目や障害種などを増減した場合、研修内容の精選や研修方法の工夫によって、効果的な研修となるかについて検証する必要がある。

### 5-3) 研修内容の差別化

オンラインの研修において、「アダプテッドの主体性・適応性」において小学校の教員と特別支援学校の教員間に有効性の差がみられた。今後、小中学校の通常学級の教員と特別支援学校の教員など研修対象者の障害児教育の体験の有無などによって、研修の内容を変える必要があるかもしれない。あるいは、対象者を絞った複数の研修会パッケージを用意することも考えられる。



## 4-3. ガイドブック WG

### 1) 活動概要

本グループでは、障害のある児童生徒がいる体育授業を担当している教員が、実際に体育授業をする際の困難さを解決するための調査用ガイドブックを作成し、アンケート調査を実施することにより、調査用ガイドブックの有効性について検証を行った。また、検証結果より今後のガイドブックの方向性について検討した。なお、ガイドブック WG では全6回の実行委員会を実施した。

#### 1-1) 調査用ガイドブックの作成

現職教員が障害のある児童生徒を含む体育授業をする際の困難さを解決するために使用する調査用ガイドブックを作成した。内容は「理論編」と「実践編」の2部構成とし、「理論編」は2019年度に実施した研修資料を理論編のベースとし、「実践編」はプロジェクトメンバーによって新たに作成した。「実践編」作成にあたり、「見開きで1頁のレイアウトにする」、「障害種ごとに作成する(本調査では知的障害・発達障害のみ)」、「ステップ1～4を示し、最後にアダプテッドのポイントとHPのURL、QRコードを加える」の3点に留意した。

#### 1-2) 調査用ガイドブックの有効性に関するアンケート調査

調査用ガイドブックの有効性を明らかにすることを目的にアンケート調査を実施した。関東圏にある小・中・高等学校31校、128名の現職教員を対象に、郵送にてアンケート用紙とガイドブックを配布して行った。その結果、教育経験年数が10年未満の群は経験年数が10年以上の群に比べて、全ての項目において評価が高い傾向にあった。その中でも、「実践編のわかりやすさ」、「構成の見やすさ」、「実践編の文章やイラストの分量の適切さ」、「データベースへの探求意欲」については有意な差が見られた。このことから、ベテランの教員より初任者向けのガイドブックであったと考えられた。また、自由記述においては、具体的な内容や実践に関する内容を求める声が多かった。

#### 1-3) ガイドブックの今後の方向性についての検討

アンケート調査の結果を基にガイドブックの今後の方向性について検討を行い、対象

がアダプテッドの経験が相対的に少ないと考えられる初任者から在職年数が概ね 10 年程度の教員であることが明確となった。また、構成と内容については、基本的には調査用ガイドブックを踏襲し、「理論編」と「実践編」の 2 部構成とすることが確認された。

「実践編」においては、アダプテッドの具体的な内容をステップ構造（基礎から応用への段階構造）で提示するとともに、分量的には多過ぎず、レベルや表現などは専門的になり過ぎない範囲を目指すことが方向づけられた。また、筑波大学特別支援教育連携推進グループとの連携により HP「筑波大学 特別支援教育 教材・指導法データベース」の中に現時点で試験的に動画をあげている。今後はデータベースとガイドブックをリンクさせ、視覚的でより具体的な情報をアップデートしながら提供することについて前向きに検討された。

## 2) 活動目標

本グループの活動目標は、障害のある児童生徒が在籍するクラスの体育授業を担当している教員が、実際に体育授業をする際の困難さを解決するための調査用ガイドブックを作成し、アンケート調査を実施することにより、調査用ガイドブックの有効性について検証することであった。

## 3) 作成 WG メンバー

- 杉山 文乃 （筑波大学体育系 助教）
- 澤江 幸則 （筑波大学体育系 准教授）
- 阿部 崇 （東京家政大学子ども学部子ども支援学科 准教授）
- 天野 和彦 （筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 准教授）
- 綿引 清勝 （小田原短期大学 保育学科 通信教育課程 専任講師）

## 4) 活動内容

### 4-1) 調査用ガイドブックの作成

#### ① 調査用ガイドブックの趣旨

調査用ガイドブックの作成は、「教育現場において障害のある児童生徒が在籍するクラスの体育授業を担当している現職教員が、実際に体育授業をする際の困難さを解決するためのガイドブックの有効性について明らかにする」ことを目的とした。

## ② 調査用ガイドブックのタイトルについて

調査用ガイドブックのタイトルは、「障害のある子どもがいる体育授業のためのガイドブック アダプテッドをやってみよう!~すべての子どもが“いきいきと輝く”体育活動をめざして~」とした。

## ③ 調査用ガイドブックの構成について

調査用ガイドブックの作成は、「理論編」(図4-3-1)と「実践編」(図4-3-2)の2部構成とした(表4-3-1・表4-3-2)。作成方法は、2019年度に実施した研修資料を理論編のベースとし、実践編はプロジェクトメンバーによって新たに作成した。作成にあたり、実践編は「見開きで1ページのレイアウトにする」、「障害種ごとに作成する(※本調査では知的障害・発達障害のみ)」、「ステップ1~4を示し、最後にアダプテッドのポイントとなるtweetとHPのURL、QRコードを加える」の3点に留意した。ガイドブックのQRコードについては、広報WGで作成したHPに飛ぶようになっており、「種目」と「障害種」で分類されたページで指導案が見られるようにした。「陸上」の表記については、学習指導要領では、中学校が陸上運動、高等学校が陸上競技となっていることから、本調査では「陸上運動・競技」とした。

対象とした単元は、10名程度の小学校の教員へ質問紙調査を実施する時期に予定されている学習内容を聞き取り、調査時期にガイドブックを直接活用できる可能性が高いと思われるものを設定した。

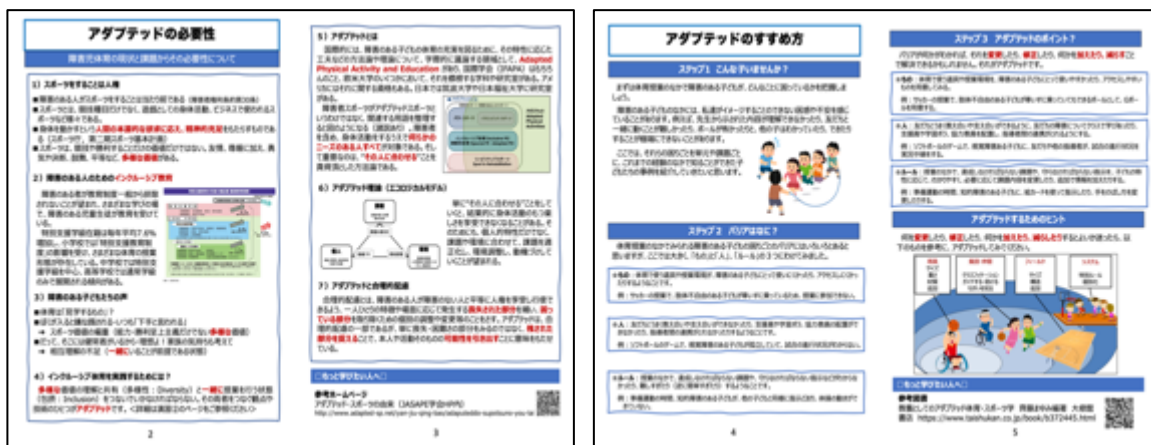


図 4-3-1 理論編のレイアウトについて



図-4-3-2 実践編のレイアウトについて

表 4-3-1 理論編の項目と内容

項目	内容
アダプテッドの必要性 (全2頁)	障害児体育の現状と課題からその必要性について、アダプテッドの定義や理論 (エコロジカルモデル) について概説した。
アダプテッドのすすめ方 (全2頁)	「こんな子いませんか」「バリアはなに?」「アダプテッドのポイント?」「アダプテッドするためのヒント」の4項目について、導入では、子どもたちの学習のバリアに対して、アセスメントからスタートすることを提示し、体育場面における学習のバリアが生じやすい視点として、「もの」「ヒト」「ルール」の3点から定義と具体的な子どもの状態像の例を解説した。さらに、アダプテッドのポイントとして、バリアに対する指導者の基本的なスタンスに触れ、「もの」「人」「ルール」の3つのポイントについて考え方と具体例を提示し、アダプテッドの進め方について概説した。

表 4-3-2 実践編で扱った領域と単元について

領域	単元
陸上運動・競技	ハードル走
体づくり運動	縄跳び
器械運動	跳び箱
球技	ティーボール (ベースボール型) ソフトバレーボール (ネット型)

## 4-2) ガイドブックの有効性に関するアンケート調査

### 4-2-1) 対象者の属性

関東圏にある小学校、中学校、高等学校 31 校、128 名の現職教員にアンケート調査を依頼し、郵送にてアンケート用紙とガイドブックを配布した。その結果、61 人から回答が得られた。回収率は 47. 7 %であった。

### ① 年齢・性別

本研究の対象は、図4-3-3に示すとおり、30代が最も多く20人(32.8%)、続いて20代が15人(24.6%)、50代が13人(21.3%)、40代が10人(16.4%)、60代が3人(4.9%)であった。また、性別は、女性23人、男性38人であった。年齢や性別に大きな偏りは見られず、各年代から回収することができた。

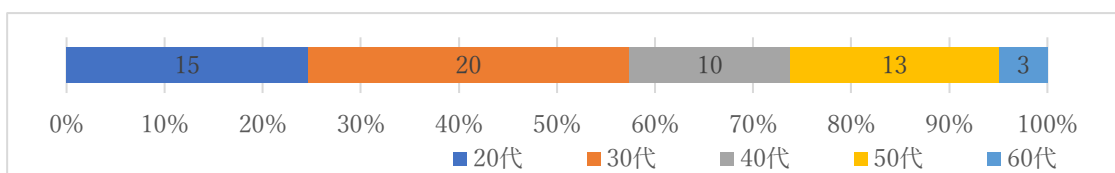


図4-3-3. 対象者の年代の割合

### ② 教育経験年数

対象者の教育経験年数は、0.5～40年(14.37±11.45)であった。また対象者のうち、特別支援教育を経験したことのある人は33人(54.1%)で、経験年数は0.5～21年(5.26±5.08)であった。さらに、インクルーシブ体育を経験したことのある人は、34人(55.7%)で、経験年数は0.5～22年(5.75±6.02)であった。また、特別支援教育とインクルーシブ体育のどちらも経験のない人は21人(34.4%)であった。

通算の教育年数が10年未満の者(少群:31名)と10年以上の者(多群:30名)で2群に分けて分析することとした。

### ③ 保有免許状

本研究の対象者が保有している免許状について、最も多かったのは、小学校で40人(65.5%)、ついで中学校(保健体育)18人(29.5%)、中学校(保健体育以外)15人(24.5%)、高等学校(保健体育)が14人(22.9%)、特別支援学校が12人(19.6%)、高等学校(保健体育以外)が10人(16.3%)であった(図4-3-4)。教育年数の少群と多群を比較したところ、中学校(保体以外)と特別支援学校の免許状において多群の方が保有している割合が高かった(図4-3-5)。

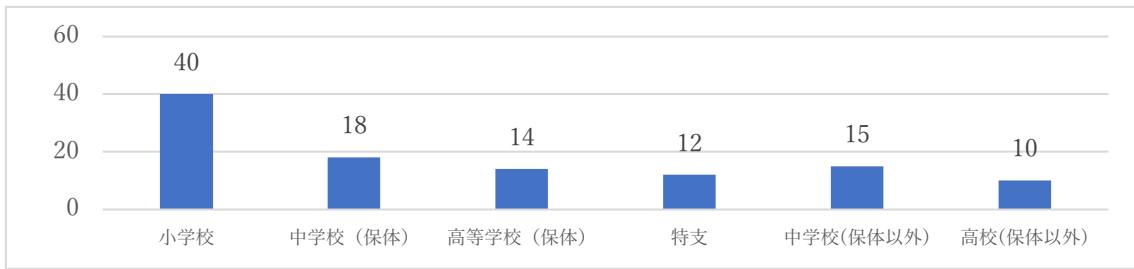


図 4-3-4. 保有免許 (N=61,複数回答)

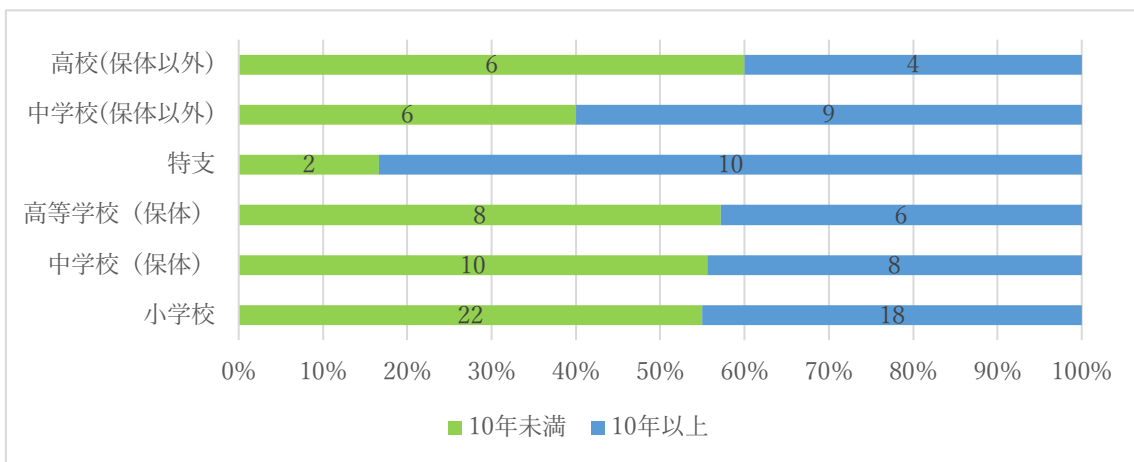


図 4-3-5. 保有免許 (少群・多群比較)

#### ④ 勤務先の学校と学級

本研究の対象者の現在の勤務先は、小学校が38人(62.3%)、中学校が22人(36.1%)、回答なしが1人(1.6%)であった(図4-3-6)。教育年数の少群と多群を比較したところ、少群と多群において大きな違いは見られなかった(図4-3-7)。

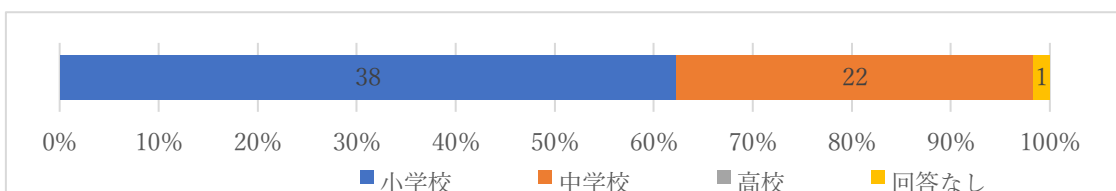


図 4-3-6. 勤務先の学校種 (N=61)

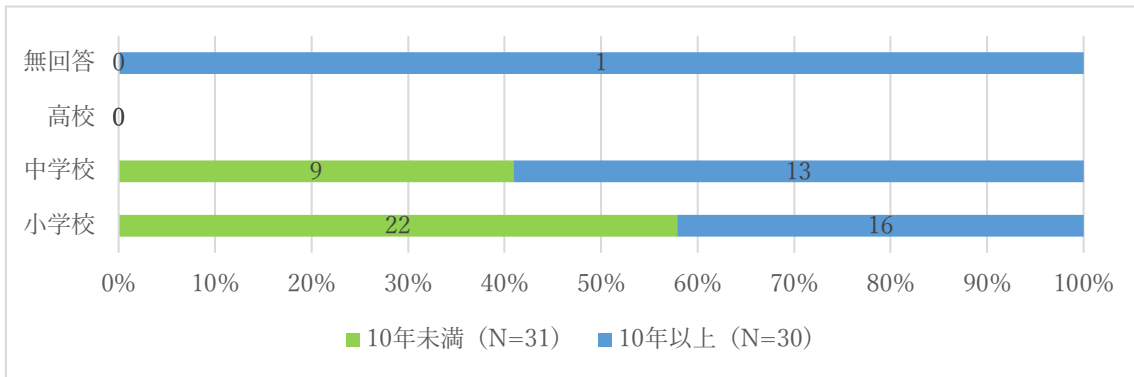


図 4-3-7. 勤務先の学校種（少群・多群比較）

担当学級は通常学級が 30 人（49.2%）特別支援学級が 20 人（32.8%）、通級が 1 人（1.64%）、回答なしが 10 人（16.4%）であった（図 4-3-8）。教育年数の少群と多群を比較したところ、少群の方が通常学級を担当している割合が高く、多群の方が特別支援学級を担当している割合が高かった（図 4-3-9）。

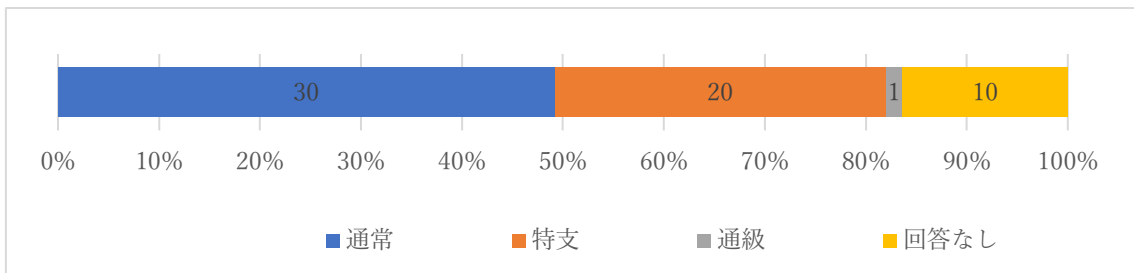


図 4-3-8. 担当学級（N=61）

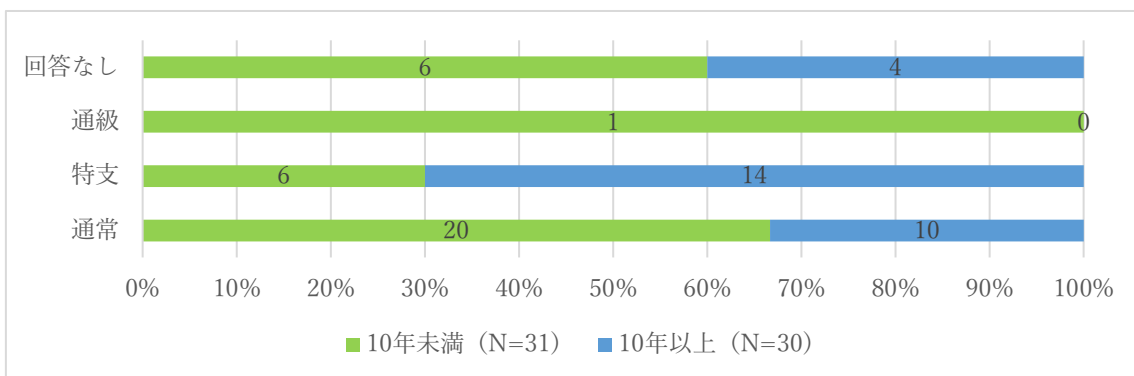


図 4-3-9. 担当学級（少群・多群比較）

#### ⑤ 障害のある生徒を含む体育授業の担当

障害のある生徒を含む体育授業の担当の有無について、有りと回答した人が 26 人 (42.6%)、無しと回答した人が 30 人 (49.2%)、無回答が 5 人 (8.2%) であった。

また、担当している生徒の障害は、知的・自閉症 (発達)・情緒 (このうち、2 つも含む) が最も多く 12 人、続いて発達障害 (ADHD、自閉症など) が 5 人、知的障害が 2 人、自閉症・肢体不自由が 1 人、二分脊椎が 1 人、場面緘黙が 1 人であった (図 4-3-10)。

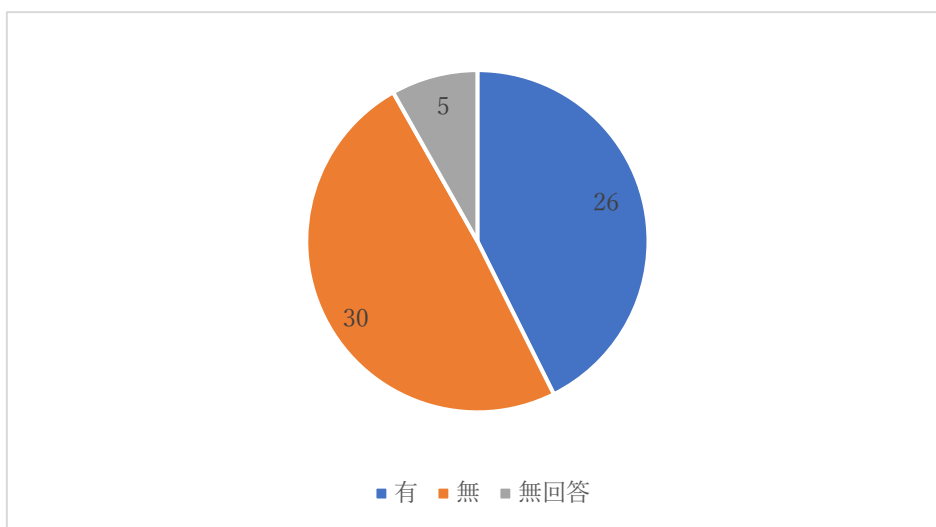


図 4-3-10. 障害のある生徒を含む体育授業の担当の有無



#### 4-2-2) 体育授業の授業準備について

##### ① 指導計画を作成する上で感じる困難さ

本研究の対象者が指導計画を作成する上で感じる困難さについて、最も多かったのは「個に応じた指導目標・内容の決定」が43人(70.5%)、ついで「活動内容の選定」が35人(57.4%)、障害や認知の特性の把握が27人(44.3%)、運動特性や技能などの整理が23人(37.7%)、その他が4人(6.6%)であった(図4-3-11)。教育年数の少群と多群を比較したところ、少群と多群で大きな差は見られなかった(図4-3-12)。

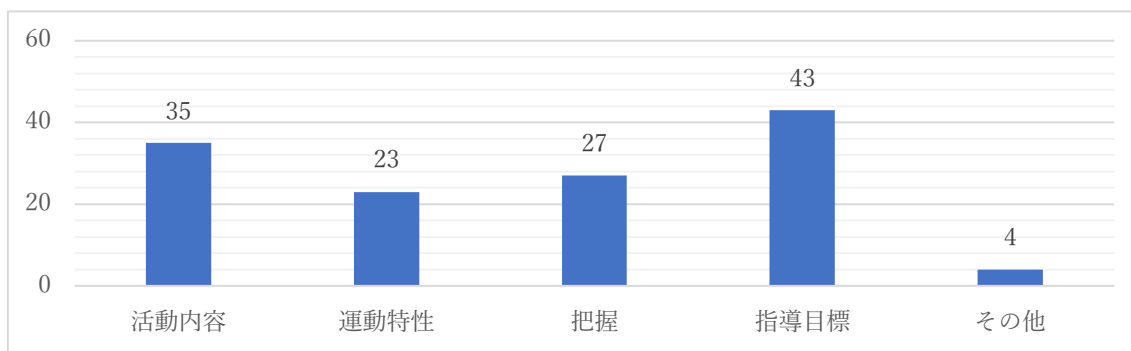


図 4-3-11. 指導計画の困難さ (N=61,複数回答可)

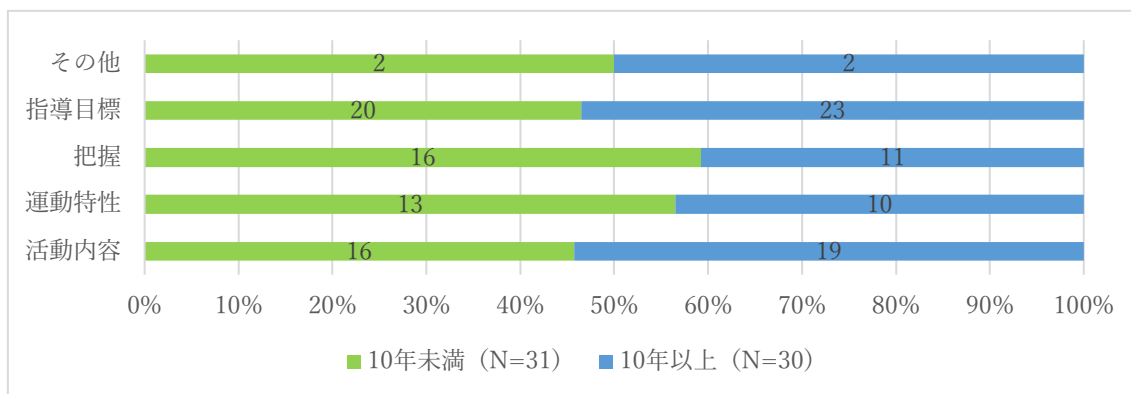


図 4-3-12. 指導計画の困難さ (少群・多群比較)

##### ② 配慮事項について

本研究の対象者が感じる障害のある児童生徒への配慮事項について、最も多かったのはクラスの友達との関係性が44人(72.1%)、ルール工夫が36人(59.0%)、安全への配慮が35人(57.4%)、用具や補助具の工夫が27人(44.3%)、その他が3人(4.9%)であった(図4-3-13)。教育年数の少群と多群を比較したところ、少群と多群で大きな差は見られなかった(図4-3-14)。

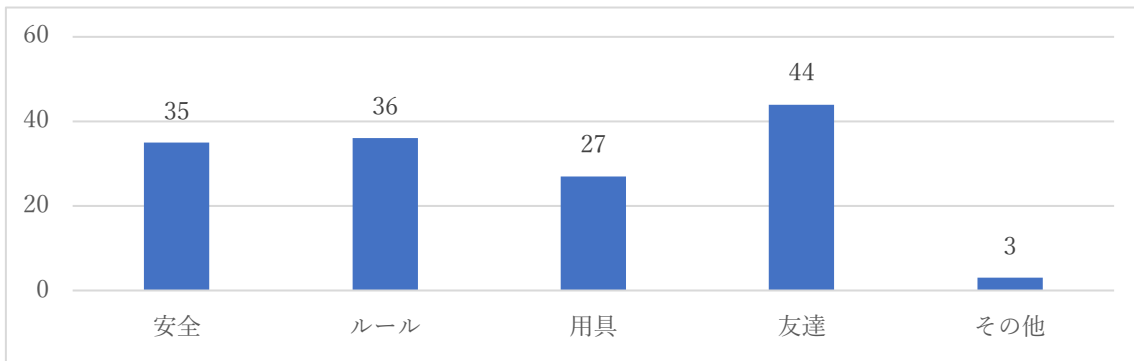


図 4-3-13. 配慮事項について感じる困難さ (N=61,複数回答可)

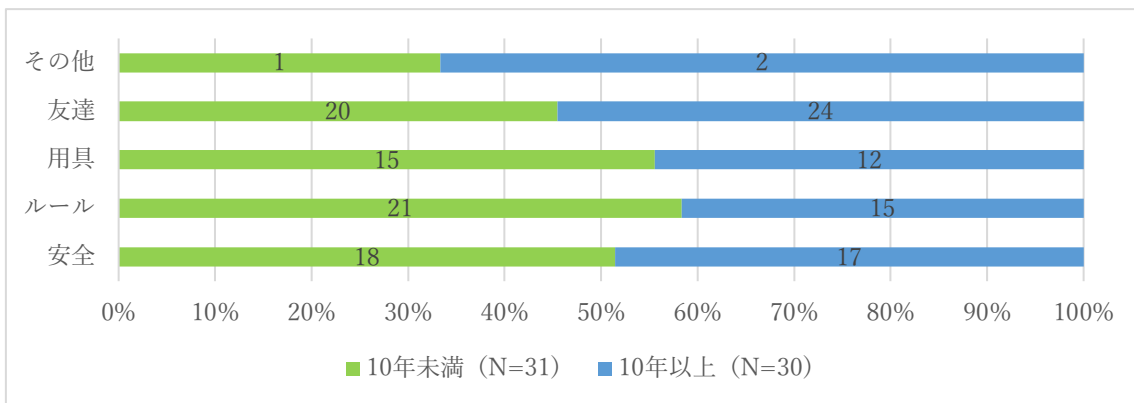


図 4-3-14. 配慮事項について感じる困難さ (少群・多群比較)

### ③ 情報収集について

障害のある児童生徒を含む体育授業の準備で困った際の情報収集の方法について、最も多かったのが指導経験のあった他の教員に相談が 53 人 (86.9%)、インターネットが 34 人 (55.7%)、書籍が 33 人 (49.2%)、近隣の特別支援学校が 11 人 (18.0%)、専門家に相談が 8 人 (13.1%)、その他が 3 人 (4.9%) であった (図 4-3-15)。教育年数の少群と多群を比較したところ、近隣の特別支援学校、書籍において多群の方が多い傾向にあった (図 4-3-16)。

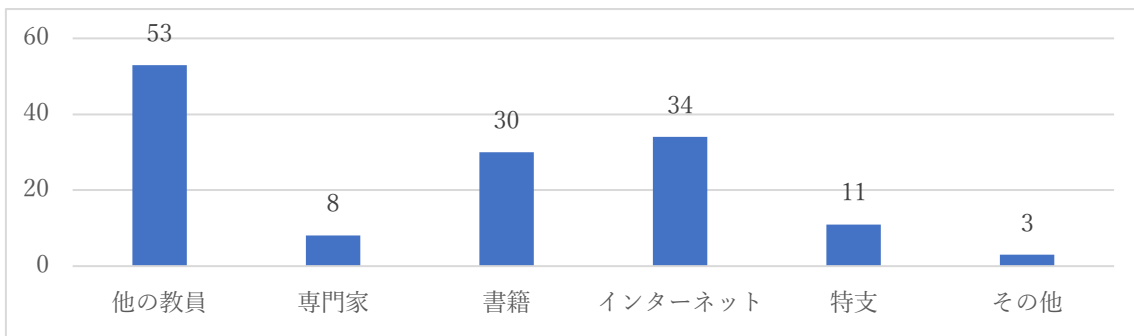


図 4-3-15. 情報収集の方法 (N=61,複数回答可)

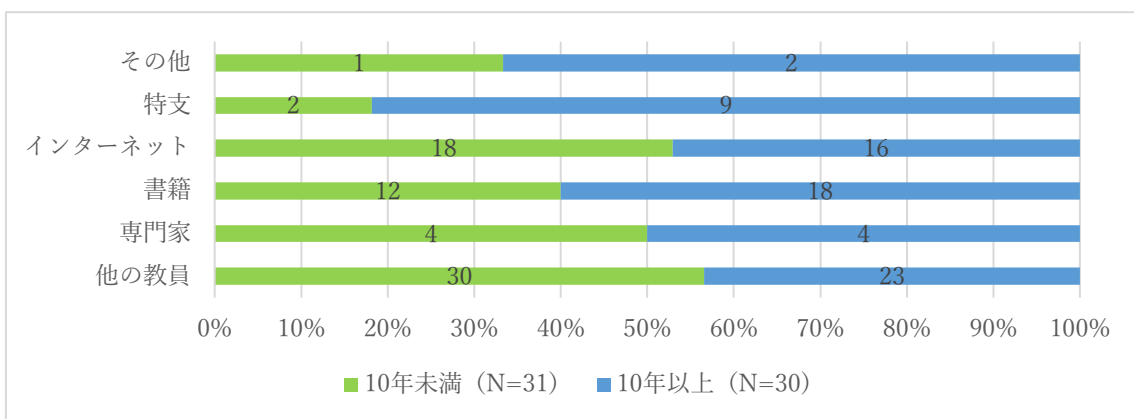


図 4-3-16. 情報収集の方法 (少群・多群比較)

#### 4-2-3) ガイドブックの評価

##### ① ガイドブックの活用の有無について

本研究の対象者 61 人のうち、ガイドブックを活用したと回答した人は 21 人 (34.4%)、活用しなかったと回答した人は 38 人 (62.3%) であった (図 4-3-17)。

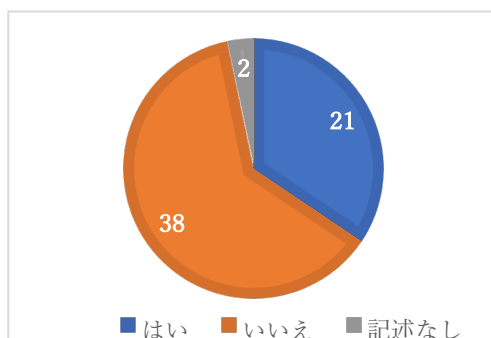


図 4-3-17. ガイドブックの活用の有無 (N=61)

##### ② 活用した種目

ガイドブックを活用したと回答した 21 人のうち、活用した種目で最も多かったのは

Tボールで10人（47.6%）、ついで陸上が8人（38.1%）、体づくりが8人（38.1%）、器械運動が6人（28.6%）、ソフトバレーボールが5人（23.8%）であった（図4-3-18）。

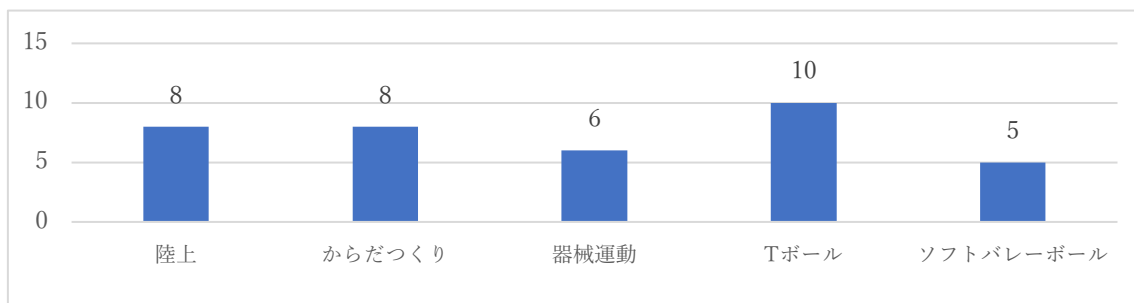


図4-3-18. 活用した種目（N=21、複数回答可）

### ③ 活用しなかった理由

ガイドブックを活用しなかったと回答した38人のうち、その理由について最も多かったのは、そのほかが17人（44.7%）、ついで、目を通す時間がなかったからが11人（29.0%）、必要な種目がなかったからが8人（21.1%）、対象となる障害が異なっていたから2人（5.3%）であった（図4-3-19）。その他の理由（自由記述）では、類似した内容でまとめた結果、「体育担当ではない・障害児を受け持っていない（6人）」「すでにやっている内容であった（3人）」、「時期が合わなかった（3人）」、「ガイドブックの存在を知らなかった（3人）」などであった。

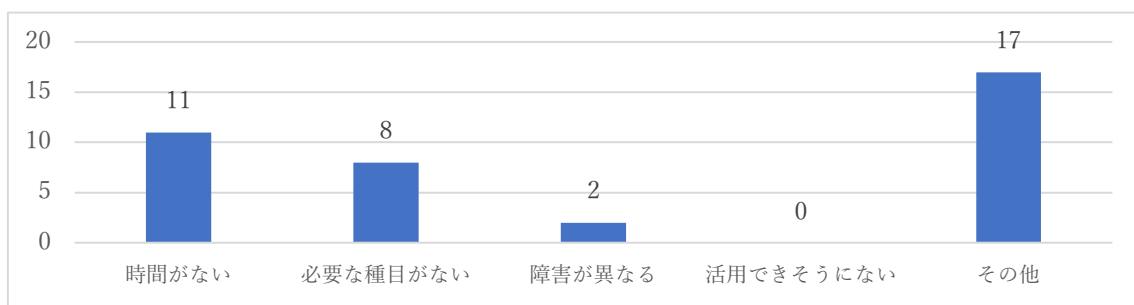


図4-3-19. 活用しなかった理由（N=38、複数回答可）

### ④ ガイドブックの評価について

ガイドブックの内容やデザインに関する質問に対して、「とてもそう思う」、「そう思う」、「そう思わない」、「全くそう思わない」の4件法で回答を求め、その平均値を算出した。その結果、最も高かったのは、「データベースへの探究意欲」で  $3.34 \pm 0.57$  で、

ついで、「実践編のわかりやすさ」が  $3.25 \pm 0.43$ 、「構成の見易さ」が  $3.18 \pm 0.50$ 、「他の教員に勧めようと思う」が  $3.13 \pm 0.59$ 、「実践編の文章やイラストの分量の適切さ」が  $3.13 \pm 0.53$ 、「理論編の文章やイラストの分量の適切さ」が  $3.13 \pm 0.50$ 、「理論編のわかりやすさ」が  $3.11 \pm 0.45$ 、「参考にしようと思う」  $3.10 \pm 0.65$ 、「アクセスのしやすさ」が  $2.85 \pm 0.57$ 、「実践編の内容は十分さ」が  $2.75 \pm 0.64$  であった（図4-2-20）。教育年数の少群と多群において比較したところ、全ての項目において少群の方が多群よりも平均値が高かった。また、対応のない T 検定を行ったところ、「実践編のわかりやすさ」について、少群の方が有意に高かった。また、「構成の見易さ」と「実践編の文章やイラストの分量の適切さ」、「データベースへの探究意欲」において少群の方が高い傾向が見られた（図4-3-21、表4-3-3）。また、小学校教員と中学校教員においても、対応のない T 検定を行ったが、どの項目においても優位な差は見られなかった（図4-3-22、表4-3-4）。

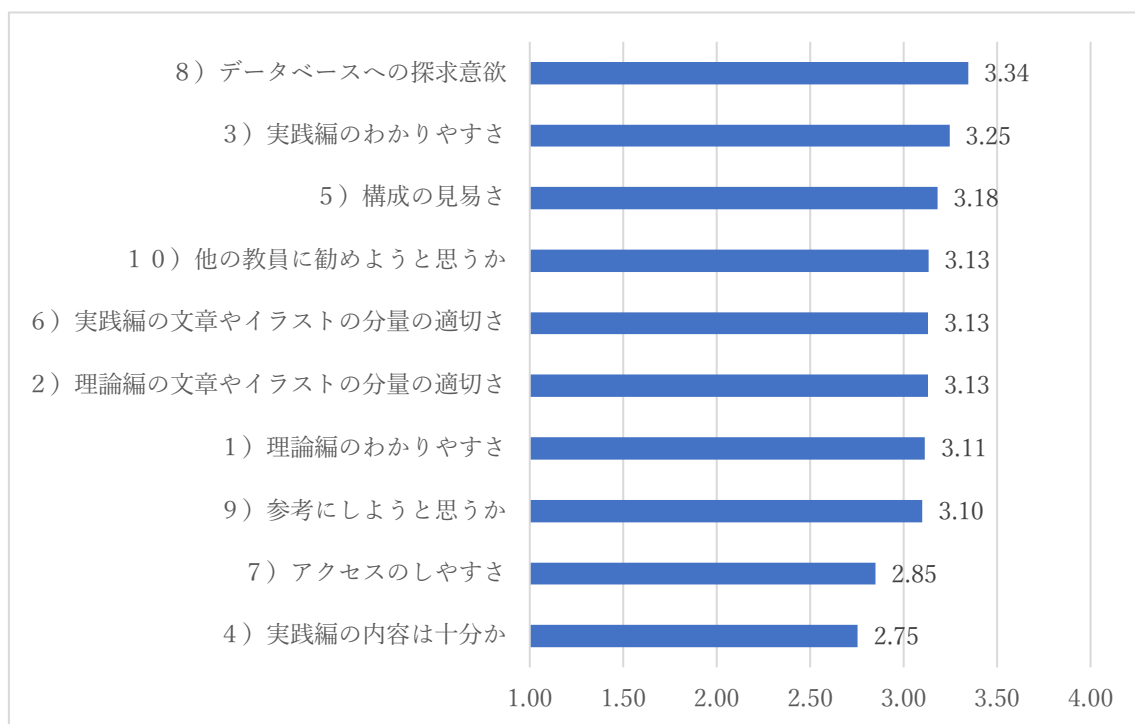


図4-3-20. ガイドブックの評価

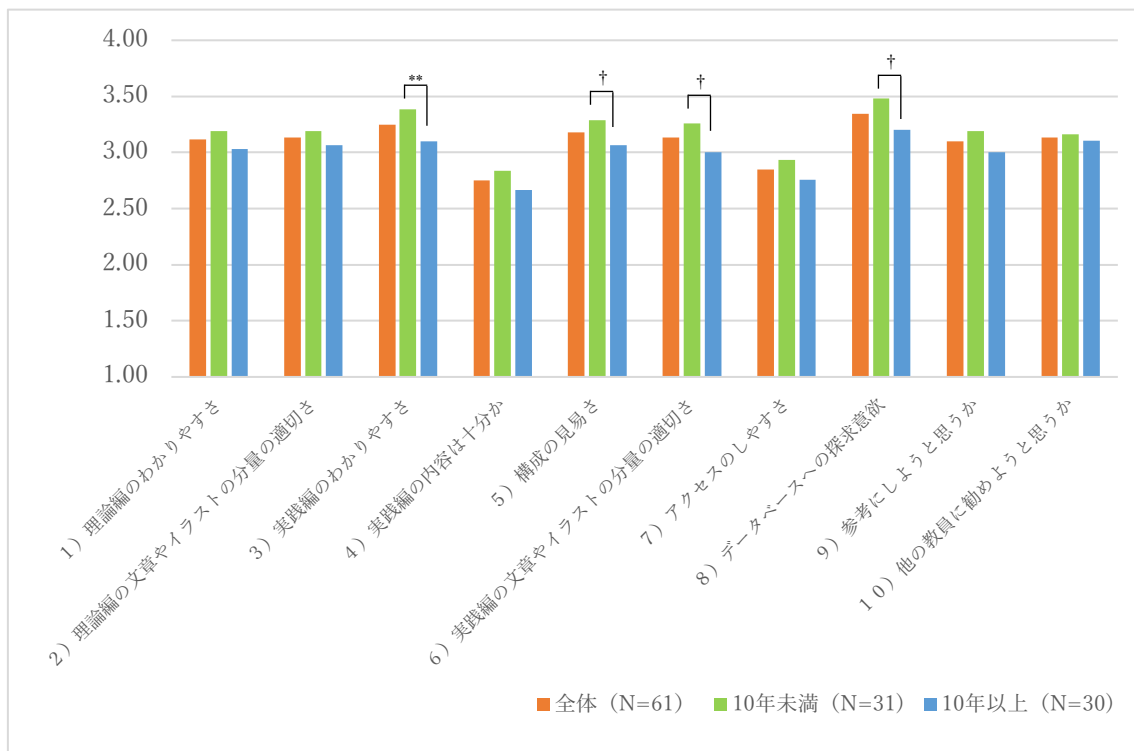


図 4-3-21. ガイドブックの評価（少群・多群比較）

表 4-3-3. ガイドブックの評価（少群・多群比較）

ガイドブックの評価	全体 (N=61)		10年未満 (N=31)		10年以上 (N=30)		t 値	p 値	自由度	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD				
1) 理論編のわかりやすさ	3.11	0.45	3.19	0.47	3.03	0.41	1.40	0.17	59	
2) 理論編の文章やイラストの分量の適切さ	3.13	0.50	3.19	0.53	3.07	0.44	0.99	0.33	59	
3) 実践編のわかりやすさ	3.25	0.43	3.39	0.49	3.10	0.30	2.72	0.01	59	**
4) 実践編の内容は十分か	2.75	0.64	2.84	0.72	2.67	0.54	1.03	0.30	59	
5) 構成の見易さ	3.18	0.50	3.29	0.52	3.07	0.44	1.78	0.08	59	†
6) 実践編の文章やイラストの分量の適切さ	3.13	0.53	3.26	0.44	3.00	0.58	1.94	0.06	59	†
7) アクセスのしやすさ	2.85	0.57	2.94	0.56	2.76	0.57	1.19	0.24	58	
8) データベースへの探求意欲	3.34	0.57	3.48	0.56	3.20	0.54	1.98	0.05	59	†
9) 参考にしようと思うか	3.10	0.65	3.19	0.59	3.00	0.69	1.14	0.26	58	
10) 他の教員に勧めようと思うか	3.13	0.59	3.16	0.63	3.10	0.55	0.37	0.71	58	

† : P<.10 \*\* : P<.01

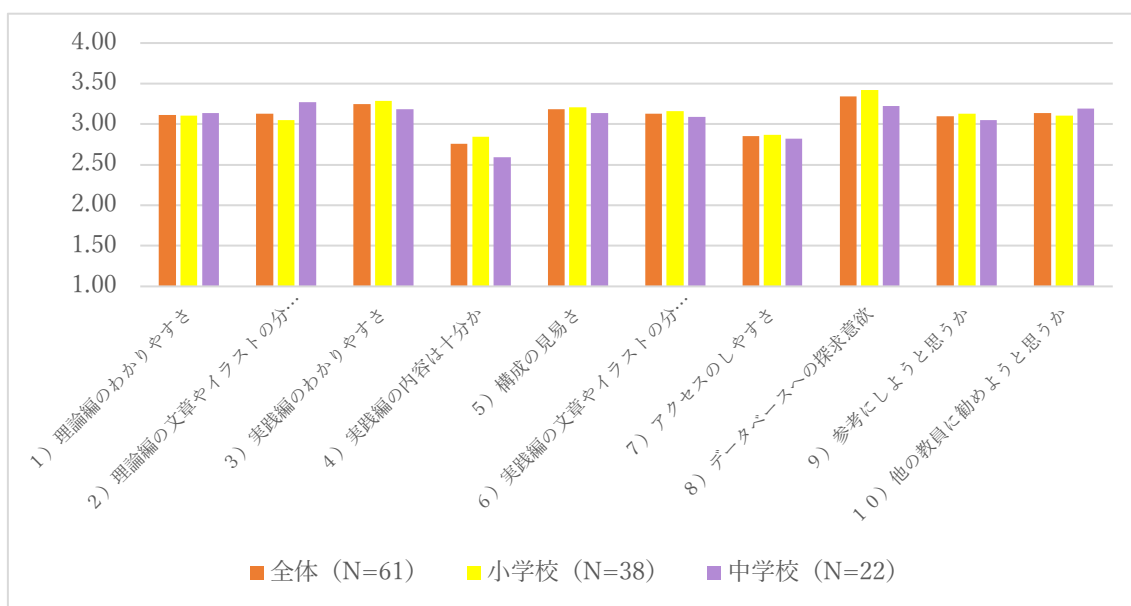


図 4-3-22. ガイドブックの評価 (小学校・中学校比較)

表 4-3-4. ガイドブックの評価 (小学校・中学校の比較)

ガイドブックの評価	全体 (N=61)		小学校 (N=38)		中学校 (N=22)		t 値	p 値	自由度
	平均	SD	度数	SD	度数	SD			
1) 理論編のわかりやすさ	3.11	0.45	3.11	0.45	3.14	0.46	-0.25	0.80	58
2) 理論編の文章やイラストの分量の適切さ	3.13	0.50	3.05	0.51	3.27	0.45	-1.66	0.10	58
3) 実践編のわかりやすさ	3.25	0.43	3.29	0.45	3.18	0.39	0.92	0.36	58
4) 実践編の内容は十分か	2.75	0.64	2.84	0.67	2.59	0.58	1.45	0.15	58
5) 構成の見易さ	3.18	0.50	3.21	0.47	3.14	0.55	0.55	0.59	58
6) 実践編の文章やイラストの分量の適切さ	3.13	0.53	3.16	0.49	3.09	0.60	0.46	0.64	58
7) アクセスのしやすさ	2.85	0.57	2.86	0.58	2.82	0.57	0.30	0.77	57
8) データベースへの探求意欲	3.34	0.57	3.42	0.54	3.23	0.60	1.26	0.21	58
9) 参考にしようと思うか	3.10	0.65	3.13	0.73	3.05	0.49	0.46	0.64	57
10) 他の教員に勧めようと思うか	3.13	0.59	3.11	0.64	3.19	0.50	-0.52	0.61	57

## 5) 今後の課題

既述の調査結果およびWGでの議論を踏まえ、ガイドブック作成にあたっては次のような方針が示された。

### ①対象について

アダプテッドの経験が相対的に少ないと考えられる初任者から在職年数がおおむね10年程度の者を対象として想定する。

### ②構成・内容について

- ・基本的には調査用ガイドブックを踏襲する。
- ・理論編と実践編の2部構成とする。
- ・実践編においては、アダプテッドの具体をステップ構造（基礎から応用への段階構造）で提示するとともに、できれば見開き（2ページ分）で全体が完結できるよう努める。
- ・分量的には多過ぎず、レベルや表現などは専門的になり過ぎない範囲を目指す。

### ③その他

- ・ガイドブックとデータベースが両輪として提供されることが望ましい。

## ① 対象について

既述の調査において、教員経験年数10年未満の群が教員経験年数10年以上の群よりもすべての項目でガイドブックに対する評価が高かったことを重要な根拠と捉え、初任者から在職年数がおおむね10年程度の者をガイドブックの主な対象とすることにした。また、本プロジェクトが10年後を見据えたアダプテッド普及・定着への実践であることにも鑑み、本実践の利活用および波及効果の経年的な拡大が期待できるという観点からも妥当であると考えた。

## ② 構成・内容について

既述の調査において、「構成の見やすさ」「実践編のわかりやすさ」「分量の適切さ」などの項目で高い評価が得られたことから、調査用ガイドブックの構成・内容を基本的には踏襲することとした。併せて、対象をアダプテッドの経験が少ない者と設定した場合、ガイドブックが「見やすい」「わかりやすい」「使いやすい」ものであることが不可欠であり、ガイドブックを身近なものとして容易く手に取ってもらうための鍵であると考えた。



### ③ その他

ガイドブックの構成・内容について上記提案に従った場合、さらに加えて書籍という物の性格上、教員自身の知見・経験の蓄積に伴って、ガイドブックの活用度に一定程度の限界が生じることは否めない。この点を補完・解消する意味において、本プロジェクト内データベースとの併用を提案する。既述の調査において、「データベースへの探求意欲」に高評価が得られていること、自由記述では「より具体的な内容や実践例の提供を求める」声が寄せられたことから、この点が強く推奨される。情報量の拡充、新規情報の更新スピードなどにおいて書籍とは異なる特長を持つデータベースをガイドブックと両輪として提供することは、教員の知見・経験の積み重ねに応じた内容の提供も十分に可能なものとなり、アダプテッドの導入～普及・定着～深化へと繋げられるものと考えた。

追加提案として、ガイドブック発刊のスタイルとして、全体をブックレット（分冊構成）形式にすること、障害種別で分冊にすることを挙げておく。

障害種別の理論編を組み入れることの採否については、さらに検討が必要な課題とする。

## 4-4. 広報 WG

### 1) 活動概要

広報 WG は、国内において「アダプテッド」の社会的周知を目的に、「アダプテッド」の用語と意味を広くアピールすることを目的に、①HP の構築と、②その媒体を活用して宣伝・相互リンク事業を行い、③アダプテッドに関するセミナーを開催することが本 WG の事業目標としている。今年度は、主に、現場志向型のコンテンツ構造をもった HP の構築の試用を行うことを優先的な具体的課題として活動を行った。すなわち現場的志向性を高めるため、現職教員を WG メンバーに加え、HP の構成やコンテンツについて検討を重ねた。その結果、障害のある子どもが授業にいる教員が、授業で何をしようかと考える際に利用、閲覧したくなる HP を作成し、HP を活用するなかでアダプテッドの視点やスキルが身につくような HP になることを目的に、試行的に JINDO の無料 HP 作成ウェブページを使って構築した。具体的には、1) 写真やイラスト、動画などの視覚的情報を多くすること、2) 指導案がある HP を中心にリンクを貼ることにした。またガイドブックとの連携を図った。特に動画については、筑波大学特別支援教育連携推進グループとの連携をはかった。今後の課題として、継続的に HP の拡充をはかるためには、HP 更新・編集のための作業内容と手続き、その負担（エフォート）、費用を導き出し、持続的に更新・編集できるための計画を策定する必要があると考えた。また、HP を通して、これまでのアダプテッド定着プロジェクトの事業成果を報告するとともに、他学会や学校体育関係機関への「アダプテッド」の広報を目的にセミナーを開催することを計画したいと考えている。

### 2) 活動目標

「アダプテッド」の周知として、「アダプテッド」の用語と意味を広くアピールするための方策として、①HP の構築と、②その媒体を活用して宣伝・相互リンク事業を行い、③アダプテッドに関するセミナーを開催することが本 WG の事業目標である。今年度は、主に、現場志向型のコンテンツ構造をもった HP の構築の試用を行うことを優先的な具体的課題とした。

### 3) WG メンバー

本事業目標を達成するため、現職教員がアクセスしやすいために、どのような工夫が求められるか、現職教員を WG メンバーに加え、HP の構成やコンテンツについて検討を重ねることとした。メンバーは以下のとおりである。

澤江 幸則（筑波大学体育系 准教授）

吉岡 尚美（東海大学体育学部 教授）

今城 遥（愛媛大学附属高等学校 特定教員）

宗田 光博（埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園 教諭）

### 4) 活動内容～HP の構築～

今年度の WG での検討を重ね、広報戦略方針として、地域の小中高等学校の体育授業担当者のうち、障害のある子どもが授業にいる教員が、授業で何をしようかと考える際に利用、閲覧したくなる HP を作成し、HP を活用するなかでアダプテッドの視点やスキルが身につくような HP になることを期待していくこととした。加えて、ガイドブックとの連携を図っていききたい。それを実現するために、今年度は、試行的に JINDO の無料 HP 作成ウェブページを使って、以下のような内容の HP を構築し、例としてコンテンツを組み込んだ。実行委員会から好評価を得、今後、こうした HP の拡充が求められ周知されることが望まれるものと指示された。

## ・トップページ

障害のある児童生徒がいる体育に関わっている教師をターゲットにするために「障害児がいる体育」というキーワードを入れることにした。

**Challenge**  
**アダプテッド**  
https://adaptedproject.jimdofree.com

ホーム    アダプテッドって何?    明日の体育で何をしよう?  
障害のある子どもについて    プロジェクトメンバー2020    2019年度報告書  
プロジェクトの歴史

# “アダプテッド”定着プロジェクト ～障害児がいる体育をゆたかに～



## アダプテッド体育＝“その人に合わせた”体育

障害のある子どもがいる学校体育の充実に貢献するため、“アダプテッド体育（アダプテッドと略しますね！）”の見方や実践例を紹介します。**アダプテッド**が日本の体育を豊かにしていけるようにがんばりたいと思います。

アダプテッド定着プロジェクト代表 齊藤まゆみ  
筑波大学アダプテッド体育・スポーツ学研究室代表  
日本体育学会アダプテッド・スポーツ科学専門領域会長

---

### What's New

**NEW** 2021年1月28日 コンテンツ更新（一部工事中）  
2020年12月1日 ホームページを開設（Toppageのみ）

## ・アダプテッドって何

はじめて「アダプテッド」について知りたいと思っている人を想定して、内容をかなりベーシックなものにして、さらに視聴しやすいように、BGM 付きの動画にするなどの工夫を講じた。

# アダプテッドって何？

ここで言うアダプテッドは、正式には**アダプテッド・スポーツ**や**アダプテッド体育**のように使います。  
アダプテッドとは？なんですか。スポーツや体育を**“する人にあわせる”**という理解をしていただいてかまいません。  
スポーツや体育をする人がどのような特性にあるか、それを踏まえて、その人がどうしたら**スポーツや体育を楽しむことができるか**、その方法が**“アダプテッド”**という言葉に含まれたと思います。スライドムービーを作成しましたので、ご覧ください。



## ・ 次の体育で何をしよう？ページ

障害のある児童生徒がいる体育の授業担当者がもっとも気にしているのが、実際に次の授業内容であることが現場の教師からの聞き取りであったため、「明日の体育で何をしよう？」というキーワードを入れた。そして、実際の内容については、種目と障害特性にページを分けた。いずれにしても、テキストベースのものと動画ベースのものを用意する予定がある。

種目で探してみる      障害特性で探してみる

## 明日の体育で何をしよう？



種目で探してみよう



障害特性で探してみよう

## ・種目でさがしてみよう

例として、テキストベースのものを示した。ネット上にある活用できそうな種目を検索した。そのうち、授業に活用できるように、指導案もしくは指導内容が閲覧できるHPがあるものに限定した。ページには、種目名、対象、指導案・指導内容のあるHPのURLを載せるとともに、種目を視覚的にわかるようにリンク先のHPの写真を掲載した。

## 次の体育で何をしよう？（種目編）

---



出典：国際パラリンピック委員会公認教材『I'mPOSSIBLE（アイムポッシブル）』より

### シッティングバレーボール

参考HP：国際パラリンピック委員会公認教材『I'mPOSSIBLE（アイムポッシブル）』

- 対象1：小学高学年・主に肢体不自由のある児童がいるクラス
- 参考指導案：<https://edu-data.tokyo2020.org/data/jp/teach/texts/iampossible/2-2-elementary-lessonplan.pdf>
- 対象2：中学生・高校生・主に肢体不自由のある生徒がいるクラス
- 参考指導案：<https://edu-data.tokyo2020.org/data/jp/teach/texts/iampossible/2-2-juniornhigh-lessonplan.pdf>が掲載されています。

※リンク先は予告なく変更される場合がありますことをご容赦ください。

---



出典：<https://www.fuzoku-niigata.jp/study/指定研究授業「キャッチフロアボール」/>より

### キャッチフロアバレーボール

参考HP：新潟大学附属新潟小学校初等教育研究会

- 対象 小学2年生・主に肢体不自由のある児童がいるクラス
- 参考指導案：<https://www.fuzoku-niigata.jp/study/指定研究授業「キャッチフロアボール」/>に掲載されています。

※リンク先は予告なく変更される場合がありますことをご容赦ください。

---

### 円盤バレーボール

## ・障害特性で探してみよう

例として、動画ベースのものを示す。筑波大学特別支援教育連携推進グループとの連携により、グループが持っているデータベースに、作成した動画を登録し、それを視聴できるように、動画のリストと、HPのURL、視聴の仕方についての情報を掲載していく予定である。

特別支援教育 教材・指導法データベース

新着情報 English 教材検索へ 動画検索へ

## 聴覚障害児の体育指導

～水泳指導における支援と工夫～



関連動画: 聴覚障害児の体育指導～水泳指導における支援と工夫～

対象	水泳単元における聴覚障害のある児童生徒
障害種別	聴覚障害教育
単元・活用場面	体育、保健体育
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運動技能</li> <li>・運動実施の安全管理</li> <li>・運動への興味関心</li> </ul>

### ・障害のある子どもについてページ

単に医学的な障害情報にとどめるのではなく、特に体育場面で、どのような困りごとがあるのを中心に紹介することにした。具体的には、障害の一般的な特徴と、その障害のある児童生徒が体育場面で見せる様子の例、その時に、その障害のある児童生徒はどのような思いなのかを概説した。

## 障害のある子どもについて（工事中）

体育場面で障害のある子どもは、どのような困りごとがあるのかを、紹介してみます。必ずしも、すべての障害のある子どもが、そのような様子がみられるわけではありませんが、子どもたちの心に耳をかたむけてもらうきっかけになればと思います。

---

知的障害のある子ども



自閉症スペクトラム障害のある子ども



ADHDのある子ども



## 知的障害のある子ども



■**一般的特徴**■ 同じ年齢の友だちと同じように理解したり社会生活を送ることに難しさを持っています。その多くは脳の器質的な障害によるもので、その子なりにゆっくり発達をしています。

### ■**体育場面での様子**■

- ・ にここ愛想はいんだけど・・・
- ・ いつも一歩遅れちゃうのよね・・・
- ・ 怒られてることがわからない？
- ・ 何度も同じ注意することが多い

■**子どものココロの声**■ 先生の言うことが分からないことがあるけど、みんなと同じように先生に認められたいから、笑顔でわかったような素振りをしてしまうんだ（わかってる時もあるよ）。

たいがいは、まわりの子の様子をみて、今何をしなければいけないのかが、わかるけど、「キョロキョロするな」って怒られちゃうし、いつもみんなより一歩おくれちゃうんだよな。

■**私たちができること**■ ニコニコして聞いているけど、もしかしたらわかってないかもしれないと思って、全体の指示のあとに、その子に**プラスで指示**を出してあげてほしい。

例えば、「帽子をかぶって外にでましょう！」と全体指示の後、その子に、簡潔な言葉と帽子のジェスチャー、そして外を指でさしながら個別に指示を試みる。

加えて、指導者ができる例を示すことで、障害のある児童生徒に前向きに関わってもらえるように意図した。

## 5) 今後の課題

継続的に HP の拡充をはかるためには、HP 更新・編集のための作業内容と手続き、その負担（エフォート）、費用を導き出し、持続的に更新・編集できるための計画を策定する必要があると考えた。

具体的には、2022 年 4 月にグラウンドオープンすることを目的に、1) HP 更新・編集マニュアルの作成、2) HP 編集委員会の立ち上げを目的に、WG を結成することを確認した。具体的な年度計画は現在、作成中である。

加えて、動画コンテンツにおいては、筑波大学特別支援教育連携推進グループとの話し合いを重ね、相互的に協力できるものと確信した。そのため、来年度以降も引き続き、関係を維持発展することが求められる。

そして来年度計画として、HP の拡充を持続的に行うために、今年度の事業の振り返りと今後の課題で示されたように、ワーキングメンバーの負担にならないように WG で検討した。加えて、これまでのアダプテッド定着プロジェクトの事業成

果を報告するとともに、他学会や学校体育関係機関への「アダプテッド」の広報を目的に、秋（2021 年 10 月頃）あたりに、セミナーを開催することを計画した。



資料：来年度のHP更新計画

アダプテッド定着プロジェクトHP2021年度計画		コンテンツ作成スケジュール（担当者と内容）						
年	月	WG（編集委員会？）活動内容	WG会議	薄江	吉岡	栗田	今城	薄江
2020年	3月	2021年度活動計画の検討と決定 予算検討 2019・2020報告書公開		「障害のある子どもについて」自閉症 コンテンツ作成	「アダプテッドって何？」 Equality doesn't mean Justice のコンテンツ作成	「次の体育で何しよう」（障害別） 聴覚障害のある児童の体育授業の一般的配慮・工夫のコンテンツ作成	「次の体育で何しよう」（学修指導要領種目内容別） 小学校1年生体育での工夫のコンテンツ作成	
2021年	4月	コンテンツの内容検討と作成 HP予算計画作成 構成メンバーと役割の確認（HP更新担当者追加？） 年間スケジュールの確認	第1回MT	↓	↓	↓	↓	「プロジェクトの歴史」コンテンツ作成（薄江・齊藤） 「報告書」「新規プロジェクトメンバー」の公開
	5月	コンテンツの作成・公開 コンテンツ内容の情報収集 特別支援教育推進グループHPでの情報公開		「障害のある子どもについて」自閉症 コンテンツ公開	「アダプテッドって何？」 Equality doesn't mean Justice のコンテンツ公開	「次の体育で何しよう」（障害別） 聴覚障害のある児童の体育授業の一般的配慮・工夫のコンテンツ公開	「次の体育で何しよう」（学修指導要領種目内容別） 小学校1年生体育での工夫のコンテンツ公開	↓
	6月		第2回MT	「障害のある子どもについて」ADHD コンテンツ作成	「アダプテッドって何？」 アダプテッドのプロセス のコンテンツ作成	「次の体育で何しよう」（障害別） 聴覚障害のある児童のプール授業での工夫のコンテンツ作成	「次の体育で何しよう」（学修指導要領種目内容別） 小学校1年生プール授業の工夫のコンテンツ作成	「プロジェクトの歴史」コンテンツ公開
	7月			「障害のある子どもについて」ADHD コンテンツ公開	「アダプテッドって何？」 アダプテッドのプロセス のコンテンツ公開	「次の体育で何しよう」（障害別） 聴覚障害のある児童のプール授業での工夫のコンテンツ公開	「次の体育で何しよう」（学修指導要領種目内容別） 小学校1年生プール授業の工夫のコンテンツ公開	
	8月		第3回MT	「障害のある子どもについて」聴覚障害 コンテンツ作成（依頼）	「アダプテッドって何？」 その人に合わせるために① エコロジカルモデルをもとに のコンテンツ作成	「次の体育で何しよう」（障害別） 聴覚障害のある児童の表現運動（運動会）での工夫のコンテンツ作成	「次の体育で何しよう」（学修指導要領種目内容別） 小学校運動会の工夫のコンテンツ作成	
	9月	コンテンツの作成・公開 コンテンツ内容の情報収集 特別支援教育推進グループHPでの情報公開 HP編集マニュアルと内規の検討・作成 コンテンツ作成依頼の検討		「障害のある子どもについて」聴覚障害 コンテンツ公開	「アダプテッドって何？」 その人に合わせるために① エコロジカルモデルをもとに のコンテンツ公開	「次の体育で何しよう」（障害別） 聴覚障害のある児童の表現運動（運動会）での工夫のコンテンツ公開	「次の体育で何しよう」（学修指導要領種目内容別） 小学校運動会の工夫のコンテンツ公開	
	10月			「障害のある子どもについて」肢体不自由（依頼） コンテンツ作成	「アダプテッドって何？」 その人に合わせるために② エコロジカルモデルをもとに のコンテンツ作成	「次の体育で何しよう」（障害別） 聴覚障害のある児童のボール運動（ゴール型）での工夫のコンテンツ作成	「次の体育で何しよう」（学修指導要領種目内容別） 小学校体づくりの運動遊びの工夫のコンテンツ作成	
	11月		第4回MT	↓	↓	↓	↓	
	12月			「障害のある子どもについて」肢体不自由 コンテンツ公開	「アダプテッドって何？」 その人に合わせるために② エコロジカルモデルをもとに のコンテンツ公開	「次の体育で何しよう」（障害別） 聴覚障害のある児童のボール運動（ゴール型）での工夫のコンテンツ公開	「次の体育で何しよう」（学修指導要領種目内容別） 小学校器械・器具を使っている運動遊びの工夫のコンテンツ公開	
2022年	1月			「障害のある子どもについて」視覚障害 コンテンツ作成（依頼）	「アダプテッドって何？」 その人に合わせるために③ インクルーシブスペクトラム モデルをもとに のコンテンツ作成	「次の体育で何しよう」（障害別） 聴覚障害のある児童の体づくり運動での工夫のコンテンツ作成	「次の体育で何しよう」（学修指導要領種目内容別） 小学校走・跳の運動遊びの工夫のコンテンツ作成	
	2月	2022年度活動計画の検討	第5回MT	↓	↓	↓	↓	
	3月	2022年度活動計画の検討と決定 予算の検討 構成メンバーと役割の確認 2021年度報告書公開	第6回MT	「障害のある子どもについて」視覚障害 コンテンツ公開	「アダプテッドって何？」 その人に合わせるために③ のコンテンツ公開	「次の体育で何しよう」（障害別） 聴覚障害のある児童の体づくり運動での工夫のコンテンツ公開	「次の体育で何しよう」（学修指導要領種目内容別） 小学校表現リズム遊びの工夫のコンテンツ公開	

## 5. 本プロジェクトにおける将来計画

われわれは、地域における通常の小中高等学校の体育現場において、障害者スポーツ指導の基本である「アダプテッド体育・スポーツ」の視点が定着することを最終目標とし、2030年に、地域の通常の小中高等学校の体育授業を担当している教員のうち、少なくとも9割が障害のある子どもを受け持つことに対して抵抗感を感じず、8割が障害のある子どもに指導することに不安を感じないで、7割が「アダプテッド」の用語を聞いたことがあるなかで、6割が、アダプテッドの視点をもって指導できるという数値目標をたてた。

上記の目標を達成するために、2019年に3年計画(2019年度-2021年度)をたてた。2019年度は、アダプテッドの視点を定着するうえで必要とされるカリキュラムの試案を行ない、そのカリキュラムを使った研修会(定着研修会)の効果検証を行なった。2020年度は、新型コロナウイルス感染症対策によって縮小したものの、2019年度で効果が確認されたカリキュラムのプロトタイプを検証を行い、効果の安定性が確認された。また試験用に作成された模擬ガイドブックを使って、質問紙調査を行い、効果的なガイドブックのあり方が明らかになった。そして「アダプテッド」の周知に関しては、現場指向型のコンテンツ構造をもったHPの構築を行った。

これらの成果を受け、2021年度は、課題①として、定着研修会のコアカリキュラム(プロトタイプ)をもとに、さまざまな研修会の実施計画をたてて実施し、2020年・2019年の研修会成果と同様の成果が現れるのかを検証するとともに、定着研修会の講師ができる人材を育成する必要があると考えている。また課題②として、アダプテッドの経験が相対的に少ないと考えられる初任者から在職年数が概ね10年程度の教員を対象にし、研修会の研修効果を現場に活かせることを目的にしつつ、現場で活用できるように工夫を加えたガイドブックを発行することを計画している。そして、目的のサンプリングした学校に配布し、その使用感を調査しグレードアップしていきたいと考えている。そして課題③として、2022年4月に正式にオープンすることを目的に、HP更新・編集マニュアルの作成とHP編集委員会の立ち上げることを計画した。加えて、動画コンテンツにおいては、筑波大学特別支援教育連携推進グループとの関係を維持発展することが求められる。加えて、これまでのアダプテッド定着プロジェクトの事業成果を報

告するとともに、他学会や学校体育関係機関への「アダプテッド」の広報を目的に、2021年秋を目処に、セミナーを開催することを計画した。

これらの事業を通して、地域における通常の小中高等学校の体育現場において、障害者スポーツ指導の基本である「アダプテッド体育・スポーツ」の視点が定着するために必要とされる具体的提言を公表していくとともに、その事業を継続的に展開するための組織づくりもまた計画していかなければならないと考えている。